



第七集
卷の目録解
中村俊定

中村俊定文庫
文庫 18
506



第七卷
卷の目録解
青藍著

レ

冬の日

慶應元五年七月廿五日脱稿

水鳥文庫

中村定

水鳥文庫

俳諧

七部集初まゝ

松巻鳥文庫



藍亭青藍著

江戸 閑樹園菊雄校

冬日

この集を冬日と号するは巻中五哥仙追加ともふ
発夕冬季なる故ありさりと冬の朝日のあはれなり
りりしよある芭蕉公の服より名つけしとあり
登り説或ハ宮柱風呂吹くて酒のめり冬の日ふ
熱田ありりしよある道齋狂哥より名つけし
といふ説ともあり

笠ハ長途の雨はほろび哉衣ハ

とまりくのあはれよものなり

風雅集 つゆりの片は袖をこころ着て野山の

旅の日をへまゝ大納言公蔭よの哥を言外

○ 冬日

ふりくさる文

俺つくーたるこび人我さあて

れよおぼえらるむりー狂哥の

才士此國またどしきを不圖

おひひ出て申侍

図 狂勺かじの身竹齋に似る哉 甚

この勺狂勺かじとつけむとときハ文字あま...
り先俳しひて狂勺の二字ハ狂哥の才士はむりて
いこふれハ省きてまぬりうとりて。ハ天和
の比字あまの格調流行せしむるぬ人の説
虚 あ。[虚栗] 其角海し。二星私に憶ふの娘年一
十五 其角の田婦子を履て金ころん心ふト尺
。我勺人あも我を啼のハ子規 其角。今朝
春の奥孫もり灰とあく櫛を富嵐雪この餘字
あまの勺早餘草あ。この外公の勺りも。芭蕉
野分して盥は雨をきく夜ふのハ廟羊を経て

あのみ何を惹草。昔あ女西行あハ哥よ
まん 昔この外子。猶あり。さてこの冬の日ハ虚栗を
えくまん。天和三の翌年貞享元年の集あれ
ハ正風并基の勺作とつへも虚栗の餘飛残り。
故のあまの吟と載れぬもの。且霜月やの巻
白ひの花の座。水子と秀勺の聖。やふも。
ハ狂勺こじの身ハといれ。こむて。挨拶の
作意。ハ狂勺の二字。決して省く。ハ勺まあ。

竹齋物語 寛永十三年のハ比山城國ハやとを

しの竹齋とて真の瘦法師一人あ。その身實
みして畧又ふもの奴とて即寺一人あ。れ
ひ出して申りハ汝かんも如く。我やこまの
名とてうらうらふもの身ひんして病者。こま
近つりか所詮諸國をめぐりていつくも心のこ
ま。人取住むやといひれ。畧のあ。その人も
いつくまでも供 かけるまづ。あ。うら。ま。仕

○ 冬の日

りんとて。三幸大橋うちまゝ中春日敷より清洲の
 宿しゆくのち名古屋まつきりちひさき町は宿をうり者板をこ
 そいで一りれ。天下一のやぶらも一竹齋をうりぬ人
 ちり一扁鵲や春深ふもまゝ竹齋をうりぬ人
 こゝあつれあつり中折しも冬の夏あつれあつれ紙
 子ま布うつけて帯おび木綿の丸くけし羽織はねおし
 まひつる紫紬むらさきのえくをさうのけ。衣故ころもこそま
 りる野の寸すん意いこししあひつるはら木きの如ごとく風倍かぜまで
 この尾張の國おとへまひまり。狂くるふむ吾身われのみ竹
 齋の境界かいがいもよも似にころと歎息なげきころ作意さくご

大おほそやとむむころの山茶花 野水

八雲街抄 たたりたたりはとんはとんこかともむたむる。

同語どうごまで唯ただころといころよりハ諸勢しよせうつし一書いっしょ上京
 都猪つぐの熊くまは有明主水あつめいすいとし酒屋しゆゑあつり。この表水あへ
 桓武天皇えんぶ今の京きやう京都を遷うつされし節時酒せつじしゆを造り
 せられしその子孫の家いへといひ傳つたやその有明酒

屋の庭いへは山茶花さんぢあなのあつり。竹齋ちくさい手折ておてりといと
 し。ゆえにころを主水すいすいとあらんころをいふに
 り人ひとあつるらん並ならみころ花はなのころとてい
 あつれまけりともともの物語ものがたりをあてし註しゆちころとき服
 夕ゆふの附意つけいもオオの附意つけいもよくころれも。予より野藏のざう
 の竹齋物語ちくさいものがたりころ夏なつを載のせし。梅うめころ天和年中てんわ中の
 印本いんぽん竹齋狂歌集ちくさいきやうかしゆとあり。又竹齋物語ちくさいものがたりころ不
 りあつて一を下り竹齋ちくさいといひ一を下り竹齋ちくさいといふし
 きけり。予よりころ下り竹齋ちくさいあり。よしてこの二書ふたよ
 ころあつれんと二十年來にじゅうねん尋ねあつれども未得みとく。本ほん
 の穿鑿せんさくを俟まちの。國くに花はな万葉記まんやふし元録げんろく十京都銘きやうと
 の部ぶ云花橋はなはし雪酒ゆきしゆ。有明あつめい。は梅うめころ有明主水あつめいすい名
 残のこり傳つたて有明あつめいと酒しゆを醸かちころの子細こまかの詳あら
 かんとも元禄年間げんろく有明あつめいと酒しゆ銘めいを考證かうしゆころ附意つけい
 竹齋ちくさい似にころと與よりころ。望のぞみ山茶花さんぢあなを
 てまゝハ誰たれぞやと上ありけり竹齋ちくさい有明酒屋あつめいしゆゑ

○ 冬ふゆの日ひ

竹齋手折てりといと

併工よりつくる按抄の附あり 按抄の附

有明の主水は酒屋つくして 荷今

有明主水の名をうけてこの表の月とせし 作意たまや
とむしる筈の山茶花とむしるよこへ 竹齋が山茶花た

むしり有明酒屋の侍ともいふまじふはつこいきとつり

き故桓武天皇有明主水は酒屋つくしてよ

明酒屋と稱て發音はるまじふまじふをア三

あふし 造工の場の模様をせしる作こ

秋 けしらの露をうけあつたま 重五

何九日赤馬と限りたる深き意味あり 主水は酒屋

造らむるは都つと見定て 万葉の哥さまこ極

めしものこ馬べらまに神うませハ赤駒のそら

むふ田唐を都とあし 白馬は黒馬あしういあ

證據あり 五月藍六万葉の哥の意ハ赤駒の居る

田舎と發音の都とあし 一はあれハ既

酒屋つくるとま馬とむしる昔をうける万葉

の哥よりて赤馬を附りと註きよとまハ二の安

ふたか 野謂耳附とあつて初字の手引ハ世 主

札決て註あつむ 附音 夜がの立いでる馬士

朝寒にとるふんと 有明酒屋の門口馬をつか

ハ馬しらのつやをうけるま附

古註ハ朝鮮芒二種の名うといふハハハハハハハ

いふまあるまなきん一種の名ふんハハ朝鮮芒と

こそハ朝鮮のまといふハハハ附意 朝鮮ハ馬の

よき地故ハ朝鮮國の牧たまハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

つけて連綿ハ附意 日の影も日晡故露もつ

稲よりやうてちりくこハ野中ハ米くハ唐

こさひきけハハハハハハハハハハハハハハハハハ

わいハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

拾物論 鷲鷹林 博朝出 捕奥 群而食 夜

○ 冬の日

雜後ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

傍よりありては後抄の附あり 後抄の附

有明の主水は酒屋つくして 荷弓

有明主水の名をうけてこの表の月とせし [作意] たまや

とむしつ笠の山茶花とむしつては竹齋が山茶花

をし有明酒屋の傍とむしつてはつこはきこをり

き故桓武天皇有明主水は酒屋つくして

明酒屋と稱して後抄はまよふかたをうら

あふし遣工もの場の模様をせし作こ

秋 けしらの露をうらありうま 重五

何九日赤馬と限りたる深き意味あり主水は酒屋

造らむるは都うつしと見定て万葉の哥をまじ

めしつもの(町)べらき神くませは赤駒のそら

むふ田舎を都とあし [白馬]黒馬もうらあ

證據ありま月監は万葉の哥の意は赤駒の居る

田舎と繁花の都あり []はあれは既

酒屋つくるとま馬とむしつては万葉

の哥よりて赤馬を附しと詳きものとまの安

ふたが所謂は []て初子の手引甚

れ決ての註あり [] 立しで馬士

朝寒をとらんと有明酒屋の []

馬 []らのつゆをうら [] 附

朝鮮のほろりまきまはひあき 杜國

白ひの月の白ひあふらうら同く香氣の白ひを

ふらあり [附意] 野馬の露く [] 朝鮮

まの生ひ茂く [] 牧の景色 [] 附

日のちりり [] 野に米を 正平

菅笠目米 [] の鄙言あり今も西海の辺に

つけて連綿 [附意] 日の影も日晡故露もつ

稲 [] やうてちりり [] 野中 [] 米 [] 庄

ささひ [] きけ [] 米 [] 附

わ [] の [] 野水

拾物論 踏 野林 博朝 出 補 奥 群 而 食 夜

○ 久々の日

帰宿其處百十為群附意野中の小

田を米を折しも土地に少れぬ人未りて。稻のよし

ありあし問ける故足下いつこり居らる人

と云ふ我ハ野の寝こ来

と答ふさま附庵をまひて居る者

楚 髪たるもまをちのふ牙のほど

無名抄 器せうとらそのつきはらやまがく

業平朝臣の髪とてうてん。まふあんど誰のため

よぬ夏ふれ人も志る心ひつこのもあひて

おけるよ。業平朝臣髪おろさんとしてより居

らるる。休とらうる作意とらへし附意そ

の住居いつれよやと人のとるよ。我庵ハ踏鳥の寝

未る林のあらしふれとそれ永く住をんとまふ

らるよ。あは。髪やまをまのふうちをとり

まはり附

いつらつしと乳をむがま

附意 ツし妻ふのおもてらる疑ひをうけて髪

きしれ。そのより稚子まで引くふれん。髪を

やまなまふおもたりける乳は稚子のまをれ

が。馬の男のうら。うら。のちらひつ

ぬ。つしと歎きつ。乳をまぼつ。ま

附

よこぬそとばまをうとあく

附意 稚子たむを 失ひつる女

墓すあし。難面も卒都。女の文書のきん

やらぬをそと。獨す。と。附

冬 影法のあるき。むく火を焼て

附意 卒都。守のあらし。あつて。時。火をこく

あま。げ。附。冬の日

あゝもろろをまじりてなくこゝろは
基守の晴さむく馳走の火をこくさま
附

さひき休ませし附

あゝトひんこし虚家 杜國

文選 詠史詩去落落落籍卷士花影空廬

この詩の趣をたゞ作あべし 附意 貧乏堪て

障子襖のたゞ賣尽し虚家と云ふて

附

秋 田中あるこまか柳落るころ 荷与

小方柳の津の國田中ありと云ふ何れ説くは

伊勢ありと云ふ史書説くはづらん田中津

の國河邊郡あり 大和物語津の國難波

小家して住む人ありと云ふ男もいと下まあり

がうけぬ年ころこゝひふとわろくならず家

こがせ使ふ人あも徳ある所みきつて只二人住

るほど小下あ物語の貧家のこまよと云ふ

んとて同國の小方柳を附るもの 附音 ぬし

つら者どもふ徳あると云ふゆきんれ 廣く

虚家こ只二人まゝして小方柳もちるは秋のあ

まんと感するさま附

秋 霧よあひ引人ちんむ 野水

船引人のあひさかま踏の人と似る故んむと

ひてつる 月清集 綱手ひく竹の下ら霧力

こめて舟路こまゝ淀の川岸 附意 田中ある

小方が柳もあつるは霧よ舟ひく淀川を眺望

さま附

月 たるれと横よふむ月ほ

附意 淀堤の黄昏

舟ひきゆく川の景色と影をえき月

とて横よふむさま附

とありさけしき町を下り居る 重五

雅語詳解 とありさけしき町を下り居る 重五

○ 冬の日

五
夏あひひそ。ひしひしく泣あつたは。曉の殊
す。寒ければ火を焼く壁に影はうつる。物のあはれ
さびしき体をなせしる附あり

あつたはひんごくし虚家 杜園

〔文選〕詠史詩云落客落客志士影守空廬
此の詩の趣きもたの作ありべし 附意 貧乏堪て
障子襖のたひ賣るじつる虚家と云ていふ
附あり

〔秋〕 田中あるこまの柳落るころ 荷与

小方柳の津の國田中ありと云何れ説くは
伊勢ありと云吏登り説くもべし 田中津
の國河邊郡あり 大和物語津の國難波あり
小家して住む人ありと云男女いと下まあり
かりければ年ころこひひしむとわろくならで家
こがし使ふ人も徳ある所ありきつ。只二人住
るは下野の物語の貧家のたまよと云ふ

んとて同國の小方柳を附るりの 附音あり

つら者どもふ徳あると云へゆきんれ。廣くしる
虚家コロ二人をて小方柳と云は秋のあ
たんと感するたまふ附あり

〔因〕 霧よあひ引人ちんむ 野水

船引人のあひささま殿の人と似る故に云はる
つひていふ 月清集 綱手ひく竹の下より霧
こめて舟路こまふ淀の川岸 附意 田中ある
小方柳もあつるは霧よ舟ひく淀川を眺望し
さまふ附あり

〔月〕 たるれと横よふむ月ほき

附意 淀堤の黄昏ころ

舟ひきゆく川の景色と影をさき月
とて横よふむさまふ附あり

とありさしき町を下り居る 重五

〔雅語詳解〕とありさしき町を下り居る 重五

○ 冬の日

この詞者聞集よとて云々 **附意** 御前より
町下り居る女終日あり居る鬱氣をそとん
こめ外面(立)てて見こしあひくも只ろき隣
を憚り戸名よきさし覗きて影あきき黄昏
の月を横よありむるさま附り

花 二の尼近衛の花のさうきく 野水

西行秘語云近衛殿の系松云註云近衛殿の別宅
ハ上立賣の南新町の西五辻の北近衛の辻の東よ
あり松の御計と云云近衛殿の系松黒川道祐
リ雍州府志もとて云々古註云二膳二膳の女中
尼よありたるを二の尼云尼といふ云 **附意** 御所
勤の女仕を辞してとありさじき町下り居る
折しもむつまし二の尼の尋ね来りけれは
れしはさきりあり今も大内のありさす何の
局の誰いありや近衛の花もさうありんと数
とひきくさま附り

蝶ハむろくみとて **白** 蝶 **芭蕉**

附意 二の尼よとて訪れてうれしかりあり
近衛の花よほと盛りあんとさうきくあり
互に来しつゝのまじりひたりあき人のま
の上きくつげ吾身の何はたとん蝶ハむろくま
むろくまと涙はろりて鼻うちひさま附り

のり物に簾透顔おほろある 重五

附意 昔仕し内室あきの通行もくばゆき合
こる女おしこのまじりさうきんつ

顔あつ
しく乗物の
さまの附り

いまぞ恨の夫をなつ声 荷子

附意 夫をなつ声
白ゆけろくんと正しく敵

なごのまじりハ白夫の矢こ
ミ有る **印** 印
さまの附り大鏡よきま

この詞者聞集より云々 **附意** 御前より
町下り居る女終日より居る鬱気をももへん
こめ外面立って見こくありども口わろき隣
を憚り戸石よりさし覗きて影をさき黄昏
の月を横よりあむるさま **附意**

花 二の尾に近衛の花のさうきく 野水

西行秘謡云近衛殿の系松云註云近衛殿の別宅
ハ上五買の南新町の西五辻の北近衛の辻の東
あり。松の御所と云云近衛殿の系松黒川道祐
の雍州府志にも云々古註云二膳二膳の女中
尾にありたるを二の尾に尾といふ **附意** 御所
勤の女仕を辞してとありさしき町下り居る
折しもむつまし二の尾の尋ね来りけり
れしさうきりも今も大内のありやう。何の
局の誰いゝもや近衛の花もさうあると数
とひきくさま **附意**

蝶はむくくみくく 白鬼くむ 芭蕉

附意 二の尾より訪れてうれしきうらみ
近衛の花のみほと盛りあんとさうきりも
互に来しき **附意** ひ変りあき人の牙
の上きくつけ。吾身の何はたとん蝶はむくくと
かゝりて涙はロなりて鼻うちひさま **附意**
のり物に簾透顔おほろある 重五
附意 昔仕し内室あきの通行もくばやき合
くる女あしきのまじきつきんら

顔あつ
しく乗物の 簾おこてあほろある
さま **附意**

いまが恨の夫をふつ声 荷子
乗物に簾もく白ゆけろなりんと正しく敬
目かかむし今をうらむるもさん

○ 冬この日

山本朝臣の御所
山本朝臣の御所
山本朝臣の御所

の故まをみて、附會の説を取へん

ぬも人の記念の松吹をんて

芭蕉

何れ日美濃國熊坂。物見の松あり。中山道赤坂の西あり。古松枯て今の八享保年中植ふ云

附意 熊坂の物見の松を登りて歌を遠矢子射

とんとつてありひてりし。その松ハ

凡そ次をせしと云附

志む一宗祇の名を併し水 杜國

宗祇法師姓ハ三善紀州の人あり。文龜二年七月

相州湯本にて卒す。年八十三駿州桃園定林

寺に葬る。又湯本の早雲寺にも墓あり。史查

曰宗祇の水といふ。美濃國群上郡山田の庄宮

瀬川のありありあり。この白泉、東野洲公宗祇

法師古今傳受をくるとこの軒まで送りな

ひ和哥を詠せし。又白雲水ともいふ

宗祇と白雲齋といふ故こや云 附意 熊坂物

見せしといふ記念の松と云。時ありて吹さる

ハ又宗祇といふ。凡流ある名のつさ。水も出来

てあせ川の淵瀬と云。轉變の浮世ありと

観念する。凡情を附

笠ぬぎて無理ゆめ。北時雨 荷子

定家謡云。よいつる北時雨。注。時雨。北より降る

のふれ。北より吹る。附意 宗祇の水を尋ん

と立出る。凡狂人折る。降る。北より吹る。魚あ

る。またりあり。笠ぬぎてむ。よめ。よ。さ

ヨコ附

冬ぐれをけてひら。唐荳 野水

附意 すべて草ハ冬の中より中よりけ

唐荳を。青と。と。いつら。繁。を。と。と

云附

あふくと碎り。人の骨。何 杜國

○ 冬の日

附意 唐詩をもつむあつちよ

碎けらるるあつちい人の骨

何ぞと疑ひしるまよ附

鳥賊いさひちの國のうらま 重五

附意 人の骨とていへ骨はあつちい人の鳥賊の甲

あつちい人の鳥の甲焼てうらま唐土の

あつちい人のあつちい誰や鳥賊の甲碎きて

吉凶をうらまの鳥賊いさひちの國のうらま

とつちまよ附

あつちい人の謎もつちい郭公 野水

附意 ほろまきりてまら夜はあつちい人の印

の花をうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

人まをうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

その謎もつちいれれれれれれれれれれれれれれ

今もまよまよ又ハ謎とつちいしてまよまよややく

まよまよつちいれれれれれれれれれれれれれれ

亀の甲あつちい鳥賊の甲焼て吉凶をうらまの鳥賊

いさひちの國のうらまのうらまのうらまのうらま

りあつちい人の風情を附

亀のト部にあつちいハいれれれれれれれれれれれ

うら 権僧正公朝

秋水 一斗りつちい夜そ 芭蕉

事林廣記 剋漏制度黃帝創漏水利器

分昼夜百刻云 枕草紙 註云漏刻ハ銅壺

水を入て箭を建つその建たる箭は百刻或ハ

甲刻をつけし故銅壺の水の漏るるまよまよ

てこの刻をあつちいも二刻とて二あつちいを二

刻とてつちいあつちいも一時とて **錦補段** 中

秋詩云 馮諼誰子取秋江水 沐入銅壺 報曉

更 劉無と 註 銅壺 漏水器也 云 秋水を漏刻ハ

用ふつちい作意この詩の因り **附意** 水一斗

漏つて秋の夜も既にあつちいれれれれれれれれれ

○ 冬の日

君のきまさぬはてし時鳥はあそびてやし謎
のしけぬ故りやとらふみびくまはる附

用 日東の李白り 坊は月を見て 重五

三昧詩 贈日東 笠 暈 市 云 主 日 東 氏 附
本也 本字白字太白 東人母長庚星を夢て詠り因
て以 故 十 歳 子 々 五 經 二 遍 せ 筆 頭 花 花 を
生 ま せ 夢 夢 後 天 才 瞻 逸 子 室 應 元 年
病 を 以 卒 年 六 十 四 盛 唐 の 詩 人 才 才 の
傳 委 一 日 東 の 李 白 坊 坊 と

凸

諱重之始号嘉右衛門後改左親衛一
諱四字文山六六山人其別稱而世三州
人也畧捨官歸洛遍尋名山而遂肥遯台
嶺之林麓一粟之邑凹凸窩中筑詩仙堂於
其中畧其平生之吟稿且覆西集行千
世畧 覆西集序云丙子歲朝鮮詩學教
授權試者未朝君以往而遇之使楮國

毛生共晤語焉試言談之餘取詩卷而讀
之了則竦然縮舌嘆曰君廼詩家之正宗也
文或勦讀者能之詩非天生清格不能為苦
人以楊白起為閨西夫子以君為日東本
杜者非妄也附意秋水一斗漏盡亦永きた
を終夜詩仙堂りて月見るまふ附

巾は木權をくまむ琵琶打 荷子
巾ハハの國の子頭巾あり 方ふる者を巾と云ひ圓

東坡詩集 人者替花不自羞
花應羞先人頭 云七部大鏡 天竺遺事云
摘紅權 替置帽上云又東坡詩 汝陽真天人
結唱者紅權 云云 云云 云云 云云 云云 云云
ありし書故本書せしむる文さうさし 古註
の杜撰笑也

唐めきうは異爪して是し存すううの君モモチ
が詩仙堂りて月見るまふ附 蓋し汝陽の身
○ 冬の日

君のきまさぬはさへ時鳥はあそびてやし謎
のしゆぬ故りやとらみびくまはる附

月 日東の李白 坊月を見て 重五

三昧詩贈日東 鑿禪師 註云日東即日

本也云李白蜀の人十歳して詩書

不通云宝應元年病を以卒す年六十四と

盛唐の詩人あり云日東の李白坊と

ソハ石川大翁の山荘洛東一衆村あり詩仙堂

と云てあり石川丈山墓誌公姓源氏石川

諱重之始号嘉右衛門後改左親衛一

諱凹字丈山六六山人其別稱而世三州

人也畧捨官帰洛東尋名山而遂肥遊台

嶺之林麓一衆之邑凹凸窩中筑詩仙堂於

其中畧其平生之吟稿曰覆瓿集行千

世畧覆瓿集序云丙子歲朝鮮詩学教

授權試者未朝君以往而遇之使楮國

凸

毛生共晤語焉試言談之餘取詩卷而讀
之了則竦然縮舌嘆曰君廼詩家之正宗也
文或勤讀者能之詩非天生清格不能為苦

の詩書あり

毛生共晤語焉試言談之餘取詩卷而讀

之了則竦然縮舌嘆曰君廼詩家之正宗也

文或勤讀者能之詩非天生清格不能為苦

詩仙堂の詩書あり

石川丈山墓誌 其嗜学也如食

飯黍四十年未杜門養痾味嘗接俗士

未嘗問俗事 辨交遊者六七十人 附竟

俗士の接は俗士を問はんと云丈山公の交遊

ある交遊尋常の者も附は故に中木権をたま

唐めりし異爪して是と俗士に交はぬ琵琶打

が詩仙堂して月をまらる附 蓋し女陽の身

○ 冬の日

造舟車者曰打舟打車細莫曰打莫汲
水曰打水野風曹雜記琵琶打琵琶也彈
人あり作人ふいぢらん云

うしの跡とくぬ車の夕ぐれよ 芭蕉

大和物語 南院の今君あふき牛をうて又のち
うらうらうらん奉りたりし牛は死よきとひたり
り。うらまきうらうしちくをじもあひひん草
このころうの命をうこの哥の侍をう牛を埋
まサしうあうの草うらうま草のうらう
きをたし作意宋花物語うらう牛佛の侍を
とて。参詣群集の中琵琶打の女うらうま
と註しう何名説附意間身てりうらう
億巾木槿をうらう客情尋常の俗うらう
牡丹花老人うらうの侍をう牛の能うらうをうらう
うらううらうしうの牛の死うらう跡をうらうま

附

箕の終の奥をうらうま 杜園

附意 黄華庵并六日上總房州の浦うらうしけ
うらうの奥人うらうの僧うらうの施うらううらうまうらうて
齋うらうふ鉢鉢うらう生奥うらうを供養うらうしん。又寺院堂舎
の供養うらうもさうまうて。奥うらう戎名うらうを記うらうて布施
とあまう。叔うらうんをうて鮮うらうまう。郷中の牛の腹
腫うらううらうてあまう死うらう失うらうけ。疝うらうひうらううらうてう
浦の漁人うらうもやうひうらううらうて。供養うらうを
うらうま附うらううらうて。云因うらう終うらうを倍うらううらう
うらうし **新撰字鏡** 鯨 鯨 鯨 鯨 鯨 鯨 鯨 鯨 鯨 鯨
巳乃志呂云

こけいのりあけの星うらうむく 荷う

性灵集 故贈僧正勤操大德影讚先序うらうの勤操
倍うらう姓うらう秦氏うらう母則島史大和州高市人也初
母氏無詞中心うらう之數詣うらう駕龍寺玉像前
○ 久の目

以香華一表誠精勤祈息夜夢明星入懷
 遂乃有娠也江州月集頭書云天衣懷
 禪師諱義懷嗣聖實一永嘉陳氏子也
 世以漢為業母夢星墮于屋除及產多
 吉祥兒推坐父船尾漁得魚付師母買師
 不忍私救江中父怒咎詬畧附意子あき
 海士よき子さつけぬとそを鎮守を祈りけり
 結願の日子あつぬんやめて明くの星をも
 乃子むべくとおれとありあつけ漁と終を神
 前工備んと其入て頭よとくき参詣もま
 二附く蓋し上は擧ぐるぬんぬの故きを種了
 としたる作意ありし

けふいりよまゆきよゆき 野水

説文黛畫眉墨也釋名曰黛代也或太眉
 以此代其處附意賢子子さつけぬと祈
 し結願の日子あつぬんの星をも子むべくと

これをも神まゆりよゆきけふ妹の眉りさう
 のうとさうけふ出さきさる凡情をよめ附
 きてけふいとさきふいとさ意あつてあふぬ
 い文字のてあをんと以てさうせし作意

綾いと一居湯志賀の花凝て 杜國

景行天皇五十八年春二月辛卯近江國小
 幸しとま心賀居あふ古又三止歳是を穴徳宮
 とよふ六十年冬十月 天皇穴徳宮より

崩也景行成務仲哀の三白王志如貝を都と
 して白手居又三十九代天智天皇六年三月十九日
 和州飛鳥の岡本より宮地を志賀ま遷され天
 智天武持統の三白王又この白手居也故志賀
 の都といふ今西郡村に御所内と字して廣さ
 ニ下むりり上壇の地ありこれ志賀の都の旧地なり

とつひつゝ居湯ハ居風呂のさひ此の条百有漏の身あふを
 捕る条去益ハ深山ノ入て身をくし夜何古き湯を

以香華一表誠精勤祈息夜夢明星入懷
 遂乃有娠也江湖風月集頭書云天衣懷
 禪師諱義懷嗣聖寶一永嘉陳氏子也
 世以溲為糞母夢星墮于屋除及產多
 吉祥兒推坐父船尾漁得魚付師母負師
 不忍私救江中文怒咎詬畧附意子亦
 海士よき子よつけぬとてその鎮守を祈りけり
 結願の日子あつぬハヤて明くの星も
 乃子むべくとわれもあつつけ漁く終を神
 前工備んと其入て頭よき参詣もま
 二附く蓋し上は執るぬんぬの故支を種
 としたる作意ありし

けふいりよまゆきよゆき 野水

説文黛畫眉墨也釋名曰黛代也或太眉
 以此代其處附意賢子子よつけぬと祈
 一結願の日子あつぬの星も子よつけぬと

これこそ神まゐりまゆきげぬ妹の眉りさう
 のきとまのけふ出まきる凡情をまゝ附
 きてけふいりよまゆきよゆきと意あつてあつぬ
 一文字のてまをてきてまゝ作意

綾いと一居湯工志賀の花凝て 杜國

景行天皇五十八年春二月辛卯近江國小
 幸一々志賀宮居る古又三歳是を穴徳宮
 とし六十一年冬十月 天皇穴徳宮より

崩去景行成務仲哀の三白王志賀を都と
 して白手居又三十九代天智天皇六年三月十九日
 和州飛鳥の岡本より宮地を志賀に移され天
 智天武持統の三白王又この白手居を故志賀
 の都とし今西郡村に御所内と字して廣さ
 二丁むり上壇の地ありこれ志賀の都の旧地也
 とひつる保元平治物語為朝流罪の条有漏の身も
 病にうて灸治ふ多くして温濕大切の間古き湯を

保元平治物語 為朝流罪の条 有漏の身も 病にうて 灸治ふ多くして 温濕大切の間 古き湯を

以香華一表誠精勤祈息夜夢明星入懷
 遂乃有娠也江湖風月集頭書云天衣懷
 禪師諱義懷嗣聖寶一永嘉陳氏子也
 世以溲為黧母夢星墮于屋除及產多
 吉祥兒推坐父船尾漁得魚付師母負師
 不忍私救江中文怒咎詬畧附意子あき
 海士よき子さづけぬとそその鎮守を祈りけり
 結願の日子あつぬんやめて明くの星をも
 乃子むべくとこれいりあつたけ漁く終を神
 前工備んと其入て頭よきき参詣もま
 二附く蓋し上は擧ぐるぬんぬの故支を種了
 としたる作意ありし

けいりりしゆまゆきよゆき 野水

説文黛畫眉墨也釋名曰黛代也或太眉
 以此代其處附意賢子さづけぬん祈
 一結願のきのあ明くの星をも子むべしと

これいりし神まゆきよゆきけり妹の眉りさう
 のうとまゆきけり出あきる凡情をまゆき
 まてけいりしゆまゆきよゆきとてあきぬ
 又此子のてあきを以てききる作意

綾いと居湯志賀の花凝て 杜國

景行天皇五十八年春二月辛卯亥近江國小
 幸してまか身居る古又三歳是を元徳宮
 としふ六十年冬十一月 天白元徳宮り

崩也景行成務仲哀の三白王志如身を都と
 して白手居又三十九代天智天白皇六年三月十九日
 和州飛鳥の岡本より宮地を志賀ま遷され天
 智天武持統の三白王又この白手居ま故志賀
 の都といふ今西郡村に御所内と字して廣さ
 二下たり上壇の地ありこれ志賀の都の旧地
 としつる居湯今居川呂信濃と越後の
 境あり秋山村といふ深山幽僻の地にて古凡を

○ 冬の日

僻

前... 山... 村... 志賀... 天智... 天武... 持統... 白手... 居... 湯... 飛鳥... 岡本... 宮地... 志賀... 遷... 山... 幽僻... 深山... 秋山... 村... 古凡... 僻

つて常ニ居湯ををくけよこの文義を以て按ずるに居湯
ハ彼方の治まて行水（カキ）のこころをあらわして信越の境ある秋山
村ハ深山までまをなま地す居風呂のまを居湯とす

附意 けふ妹の眉よりあやさるとの湯

古のつとむる妙上藤妹の方より帰り来る居湯せ
と綾一重著て湯殿よかむいよとれた

りつとありしき官女体たゞく所り名り
あつてあや志賀の都の花さる大内のみさ
まをせし附あり新千載志賀の浦やよせ
く波も白妙の花さきあるすひの山風 伏見院
御製志賀の浦やさくさるま山風よよめ
さふぬ花のさ波 六條内大臣云この哥どの景
色をとりたる句作あるし旧註ひとりの綾より
て花でもきとまよる一とあはれ綾一重の綾衣
着て湯殿のゆきこま地下の者の襟衣さるお

同

廊下ハ藤のけつる也

重五

りけつる一説ハ藤の影のあつとつてあふん
一説ハ懸つるありて二説の内今案するより

自氏文集 繞廊紫藤架 禁秘抄 藤壺の余云

藤懸 蝦手木云りて文をいれ懸つる後

附意 花さきいれよる綾

湯殿つきの廊下ハ藤の懸つていゝ志賀の
内裏の景色をせし附あり

あはれも壯年

いよこころを振る

を川雪のおとしを誇きてる野水

文選 詠史詩云被褐出閭閻高步追許

由振衣千仞周濯足万里流左云前文ハ

冬の日

存。但依の傑といひ平家の人の隠れたる所と云其
 村にて居風存の支をいづりとも。居湯も今子
 いふ。北哉雪譜云々。附意 十六妹の
 眉つきよゆきといひ過太の。つとて大も。妙女
 臈もいふ方より帰り来り湯あせんと綾一
 重着て湯殿まじり。居湯まひんと。比良
 比良山ちりり吹入る。花のうらぶる故。漉と
 りる。あまありき。官女体たぐ。所名り
 向ふ。あまや志賀の都の花さうり。大内のお
 ませせ。附意 新千載 志賀の浦やよせ
 くら波も白妙の花あきあらすひる山風 伏見院
 御製 志賀の浦やさくらあきあらすひる山風
 さふあぬ花のさ波 六條内大臣 公の哥りとの景
 色をもちたる作ある。旧註ひとの綾より
 て花とまきとも。まよりの。あま。綾。皇の綾衣
 着て湯殿まじり。地下の者の洋衣さ。お

同

廊下 藤のけけつあ也

重五

けけつあ。一説は藤の影のあけつとてあまの
 一説は懸つとあま。二説は内今案ま。

白氏文集 繞廊紫藤架 禁秘抄 藤壺の条云

淺懸 蝦手木 云々。文をこれ懸つとて後

附意 花ふきん。R 綾

湯殿つきの廊下ふ藤の懸つといひ。志賀の
 内裏の景色をせ。附意

あまのしん年

いづりともを振る

冬川雪のおとと袴きてり。野水

文選 詠史詩云 被褐出閭閻 高步追許

由振衣千仞周濯足 万里流懸 左 去前文ハ

冬の日

とてふらふら有漏の身あらたや出して分向ふにあ
りてうへう大切の間のき湯屋をうへ常より
ゆてふらふらふら文を按ては温倉を煩ひ
湯屋をうへ毎風をうへ茶を煎り浴したるまは
今も信越の境ある秋山村に古川をなす地あり居風
居湯といふし北越雪霧といふ一説居湯は今も
諸候の用あり金ふさ風をうへといふ

この詩は本づく「夕暮官」を詠いて衣を乞ふ。秋
敷行脚の文ともある。秋津洲の国くを経りし。
あふのまゝ子生涯を楽まん。年おとふあふ
とも仕年いままゝ自由を乞ふ。雪のふり日勤
の身のりり。さあ。さあ。も窮乏工袴きてく。
あふとり。迷懐の作意。

霜まきく見る薙の食 杜因

附意 前句もつ雪をよむとつとも雪の景色を
よつあふ。仕年いままゝ衣を振る。遊歴行
脚の自由を乞ふ。作意あり。故。朝白の
枯葉は霜あふ。又あり。あひひ食
く。野水。官もつ。許由を思ひ。足を万
里の流。濯。さあ。ぬ。窮乏。境界をよむ。
る。撲。撈。の。作。意。

野菊まきくたづぬ蝶の羽をんて 芭蕉

昌黎文集 鮮鮮霜中菊 既晚何用好楊

揚弄芳蝶 雨生還不早 運大勢 兩值遇 婉
變死相保 拾遺思草 菊くはとひ子蝶の
さぬうふさきうら花やいのちふん 詩
哥のめもいふ。作意あり。附意 朝
白の花見て食ひ。庭の野菊つねて
蝶もまじ。か。冬。け。き。あ。て。情も
あ。ひ。つ。紅白の枯葉。あ。き。く。雨相の朝け
ふ。附

うづらやけはとくまひきん 荷兮

和訓栞 鶯鳥の轉を取の義 附意 野

菊まきくづぬ。蝶も羽をんて。舞き。あ。暑秋の
野辺のこゝ 鶯お

りもさづれし。車 附

用 麻呂月袖 鞆鼓をあきん 重五

羯鼓録 擊以兩杖 法 通典 如漆柳 兩頭俱

擊以出 羯中 早 羯鼓 附意 鶯お

○ 久この日

吉和永三年十月十六日小松殿の次男新三位中将實
盛其時ハ、越前守として生年十三より八ヶ
つ、聖武天皇の降、くろく、枯野の気色誠、ゆ
ら、け、れ、若、侍とも三十騎を召、召具し

滑野や紫野右近馬場工打いて、鷹と

法印とありて永、櫻雀を追立、終日、

妻と、還倍して貞徳を生と、然る、

然、才能、和漢の字、連、哥も宗卷の

門人として、甚、妙を得、く、自、徳、名、乗、

して倍、稱、ハ、松、永、結、左、門、と、り、る、坂、太、閤、秀

吉公、連、哥、を、村、を、ひ、け、れ、貞、徳、ハ、細、川、幽、齋、の

文庫を、禰、と、机、筆、を、勤、め、延、陀、磨、と、も

又、長、頭、磨、と、も、一、つ、優、駿、と、一、つ、頭、と、し、長

つ、故、と、も、**玉海集**、**頼、序、云、貞、徳、弱、と、り、**

こ、人、の、元、龜、二、科、年、工、生、の、華、洛、と、跡、と、い、ひ

の、夏、久、し、**中、永、應、二、年、霜、月、十、五、日、先、師、貞、徳**

つひ、か、れ、ひ、て、鳥、羽、実、相、寺、の、松、蔭、御、り、を、奉、

と、註、曰、貞、徳、に、隱、士、と、り、富、て、洛、外、二、五、園、の、別、荘

也、梅、園、桃、園、芍、薬、園、桜、園、芦、の、丸、屋、と、い、ひ、

桃、園、の、あ、い、い、ん、**附、意、麻、呂、と、い、ひ、貞、徳、と、**

あ、桃、花、を、折、折、月、と、兵、し、て、袖、に、羯、鼓、の、拍

子、を、折、ん、と、り、**附、意、**

明、皇、弄、羯、鼓、**桃、杏、皆、没、之、羯、鼓、桃、杏、の、附**

意、と、い、ひ、

雨、この、清香の田、螺、り、う、あ、て、**杜、国**

雨、この、雨水、湛、て、溢、り、を、い、ひ、**金、葉、五、月、雨、**

沿、の、岩、か、き、水、こ、も、て、流、る、い、き、と、い、ひ、**師、頼**

と、い、ひ、**附、意、貞、徳、の、几、雅、と、い、ひ、好、事、の、あ、ま、う、雨、水**

湛、て、と、い、ひ、**浅、水、の、沿、の、田、を、と、い、ひ、桃**

園、の、泉、水、を、掘、植、と、い、ひ、**附、意、井、出、の、蛙、と、い、ひ**

よ、せ、と、い、ひ、**我、野、の、虫、を、庭、子、と、い、ひ、奇、と、い、ひ、者**

○ 冬の日

と車もひしめしめさし出さるる夕月のみ
りよ何唐あをい童おんせを驚りて羯鼓を
うちぬをうささまに附く

桃花をたむる貞徳の宮 正平

滑替太平記 松永禪正少弼婦男妙顯寺に
法印とあつて永種といふ下冷泉融舟の自女で
妻とて還俗して貞徳を生む然るに貞徳は自
然才能として和漢の字にうらふ連哥も宗卷の
門人とあつて甚妙を得く水も貞徳名乗し
して倍稱ハ松永緒左門といへる頃太閤秀
吉公連哥を村をひけれ貞徳ハ細川幽斎の
文庫を預りて机筆を勤めし延陀唐とも
又長頭唐ともいへる優駿として頭を長
し故に名を玉海集 貞徳の序云貞徳の
コ人ハ元龜二年生ハ華洛跡をいひ
の夏久し翌永應二年霜月十五日老師貞徳

つひにかへりて鳥羽実相寺の松蔭御を奉り
たま註曰貞徳に隠すは富て洛外に五園の別荘
あり梅園。桃園。芍薬園。桜園。芦の丸屋。よりの
桃園のありいふに附意麻呂といふ貞徳とい
ふ。桃花を折月と兵して袖に羯鼓の拍
子をおんとし附き 園二法
明皇弄羯鼓 桃杏皆發之羯鼓に桃を附
きこころに

雨のこも浅香の田螺をうらめて 杜国

雨のこも雨水湛て溢るをいふ 金葉 五月雨に
沿の岩かき水こえて流るべきをいふ 師頼
去哥に水こもるをいふ 雨もるといふ能辨
附意貞徳の几雅に多き好まのあまうよ雨水
湛てとくさかき浅香の沿の田をいふよ桃
園の泉水に堀植をいふよ附き井出の畦をいふ
よせは我野の虫を庭にうつさるひ 哥も者

○ 冬の日

流の好事。陸奥辰香御ふ。辰香の沼の田螺
をくみくおよとくせさる。俳諧の好事ありし

春 奥のうきうきと口ふきまき 野水

源氏行幸 大今まで長ひきつくとた位よきで
云た位よきと思ひつてなすさま 附意陸

奥の任國 一々為仲辰香の従者ありて雨水た
へてくえつて浅香の田螺を土産はく都の席

りの庭の泉水を塚うゑ傍に置てひてく。陸奥
よきしぎの室とくといと実く。何是よけつと

つりよき更のくましと今さういひつて位よき
附 為仲辰香集 つけまの花ははくくちの

くのちづめおともさうかきくさふ奇をむつて
ちらのくまじし時のつらきを海よまのひやへ

床をけりて流るるくまの男 若き
附意 古注曰奥のきさうきと位とつよる陸奥
魁の傾城を見つて。田舎の奥詞あり

く床よる近くあひる。同郷まで従わたり
とあつてまきまき

縁 さまづの恨のしりし せせ
附意 稚きういといとちまてつ合ふよん成長の

後めあるとんと親と親の契約ありともまき
の人身を互に疎くまじし。我身薄くして

る川竹のうきつとめ。縁なきかめ
うき今も残れと。床をけりてくまのまきとも

語るまき附
口ととと痛をちさうらふ 野水

和名 疵 疵在子 附意 疵倍之布復倍 附意
既に敷きき縁をの女は痛ありと告る者あり

りて。結納を改とまじし。女のせまきあひ復ひ
てヨミコ疲勞つてくまの故口とと痛をちさる

かさへ合ふく。口管縁さまがせ一人恨
のこまきとつてまき附

○ 冬の日

明日いりうふび送らせん 重五

附意 城中種よくて疲劣の軍勢が戦の術を
尽くれば大將に唾いさきよく切腹して取り高の
首をくせんとおもへども面上の痛ろろしく死な
恥辱をのこさんと魚泉のさかんうつせんらあやう
んも飢渴の勞をかたしごころ口をさきまふ
と歎息をよまふ附く

小三太と益とせひとろし 色直

附意 明日いりうふ首あくるんとす。龍の名残の
酒割の小三太と益とせ大將とろし誑じり
さき附く。軍記に大正八庚辰年春正月秀
吉公播州三木の城を攻め城主別所小三郎長
次鐵鉞の變り迫りて龍城の術尽し書を浅
壁長攻め寄て死兵双牌を助命せし自殺して
城を渡さんといふ秀吉諾して酒肴を城中で賤
城主長治大に抱へて酒宴を張る云龍のうら

小三太まで三石のさきうらひの休ませる作

月、遅くれ牡丹ぬき人 杜因

附意 小三太とよ僕と益とせ誑したるむら
こ兼し牡丹ぬき人とあつて悪人とおもへ月にお
くれとよさう附く 天木 日か名花ぬき人たか
にて只一枚のさきうらひ 和式部

縄あゝのわたりや水壁 重五

附意 牡丹ぬき人ともろく月におろくとあ
宵明の草の長者退轉しるるのる鋪よるひ
入てこれ入口を縄して細いしちつしやれ
壁あちていりしゆけさうとあき盛者心表の休た
しとせお附あり。案きま風雅の狂々葉し
とてまある花をぬきま人も故こゆきまあ花
みよまんと明やしを附く 作者此用心
ころをすけてし

まつくもの地藏城の 荷

冬の日

附意 戸板をけしハカを渡りあてりるあどく
壁面ちりり吹やみちあつるの中は石工住て
こつこつと地をうらみひきす所の休た
くせし。附き

初ふのせとや嫁のいやく 杜國

附意 ちつこも地をうらみさびき所て
つたのせとや嫁のいやく 仕粧あつて画
ナヨは附き

くぶらいくらの春をうらゆき 野水

附意 老小女の通称よあこつささひめ
をていくらの春をうらゆきもたら花さくせ
りらほとあつてあきといふよは附き

柳心こ餅あめねやほらあ 荷子

餅あめねやほらあ

附意 柳箱も餅あめて春を
くく 柳箱のいやくのうらみ寝げあつ白
て房をうらむて答ひいくらの春をうらゆき
りんやとあつて附き

うくひと起よ命燭とが 芭蕉

枕草紙 雪の夜ふゆもいずこふきこちを
ハハ汪いすこふきと夜ふゆまに附意
つあ。里も命燭とあつて立て暁もあつめ
こまも雪のあめと起てあけしと筆を
のをうらふあをけあき婦人の体たくとせ
こつ附き

篠まき梢の折り帯さび 野水

附意 前紙燭とりて雪をうらひこつささ
るをこは構ひつき農家ふと止らて夜あ
さんといふ客紙燭とりて厨つかりとて体
こつあし庭けしさいふあんと雨たあゆ

○ 久この日

ふるよ、只條ぶくくの中、校の木の梢、
ひくさーい、てるる、帯の、後、中、さき
き、眺、け、し、う、か、い、作、や、さ、さ、言、や、ん、ど、起
て、う、け、し、と、い、さ、ま、附、く、堀、川、百、首、夜、を、あ
て、た、く、う、い、ま、の、色、き、け、い、い、も、竹、を、植、て
ら、る、か、ふ、跡、仲、**草菴集**、て、い、竹、の、そ、や、ま、の、み、の
く、ら、き、夜、の、う、い、ひ、ま、の、色、を、あ、け、ゆ、く、さ、の、
吾、の、景、色、を、い、え、て、附、意、を、ま、し、

三線かゝん 不破のせき人

不破の関、美濃國、不破郡、ま、り、と、い、む、月、の、板、庇
を、も、り、入、り、住、あ、い、い、な、さ、ま、を、吉、吉、と、い、ふ、昔、に
関、尾、の、人、を、と、り、と、い、て、**千載集**、あ、い、い、ふ
こ、不、破、の、関、尾、に、旅、わ、り、て、夢、を、と、こ、こ、の、画、
か、り、り、ん、**観宗**、**拾玉集**、旅、ね、も、不、破、の、せ、き、や
の、板、ひ、さ、い、と、い、は、る、夜、の、あ、い、い、ん、と、い、や、**附**
意、後、竹、の、い、い、い、と、い、て、桐、の、板、の、帯、の、こ、残、し

冬枯のあんなる景色を不破の関をめぐりて
旅ねせる客さびさき樓ね三線を我ひき
あそむんといふも附く

道中より美濃で打る琴とぞる 世直

附意、関をり、逗留する、遊歴の客、つれ、の、已
ひ、さ、う、道、を、た、る、の、美、濃、路、を、打、る、琴、を、調、
ら、う、と、い、は、る、詮、あ、う、と、い、は、る、琴、盤、と、い、は、る、よ、
三、線、と、い、ひ、き、て、遊、ん、ぶ、と、い、は、る、と、い、は、る、
附、く、

ゆさめくのみさこも 七十 杜國

附意、年よ、い、記、憶、も、こ、ら、く、あ、う、て、道、を、た、る、美、濃
を、打、る、琴、を、い、は、る、あ、い、い、ん、何、ま、も、亦、し、こ、も
く、今、に、浮、世、の、あ、い、い、と、い、は、る、あ、い、い、ん、命、つ、い、て、死、
せ、た、わ、あ、い、い、の、さ、こ、も、七、十、と、い、は、る、附、く、

奉加めり市堂は金くらふみか 重五

附意、ゆさめくのみさこも七十、養生もくあき、
附、く、

○ 冬の日

にせむらふより外、歌のりて由堂建亨の奉加り
つきて金寄進(よきしん)の附(つ)り

いづれの傘の下、傘りきりて 荻子

附意 市堂(いちどう)のよき寄進のりて由堂建亨の奉加り
ハハハハハ一本かりて三人、傘りきりてさま附(つ)り

蓮池(れんぢ)の遊(あそび)ふ夕暮 杜園

附意 鶯の子(ういす)のよき蓮池の遊ふ夕暮、雨やのせん
みも家もけいれいづの今を三人、こがりきりて

ゆき子附(つ)り。夕暮、雨を立とてこがりきりて
いらじや

まじ子午づつ、薄様(うすやう)をとき、 野木

附意 蓮池(れんぢ)の遊の子あまひる、月景を忘りて
ら暮らひ、まじ影(かげ)子あまの料(りょう)と薄様紙(うすやうがみ)を

廊下(らうげ)の扉(しほ)をきこみて、附(つ)り。古註、紙(かみ)を
職人(しやくじん)とて、こがり(こが)り、註(しゆ)り(り)とて、つと

り子作意(しやくい)のこがり

月あつち、唐輪(たうりん)の髪(かみ)の赤(あか)枯(か)て、 荷子

附意 てつと、薄様(うすやう)をきこみて、文(ふ)聖(せい)とあま
を男(おとこ)とて、手眼(てん)一統(いつとう)の附(つ)り。故(こ)て、たひいひ

女丈夫(にょぢゆう)とて、赤(あか)枯(か)て、髪(かみ)を唐輪(たうりん)の髪(かみ)の赤(あか)枯(か)て、
梅(うめ)きこみひ月(つき)たこて、人(ひと)品(しん)骨(こつ)がらひ、月(つき)た

かここをきこみ、附(つ)り。或人(あるひと)難(がた)て、曰(い)唐輪(たうりん)の髪(かみ)の赤(あか)枯(か)て、
あつちを女丈夫(にょぢゆう)と註(しゆ)り、前(まへ)り、 青藍

陳(ちん)とて、曰(い)春(はる)の別(わか)れの月(つき)あつち、あつちと
よ附(つ)り、跡(あと)下(した)花(はな)の字(じ)より、唐輪(たうりん)の髪(かみ)の赤(あか)枯(か)て、又(また)附(つ)り、春

か、こらの髪(かみ)をむづし、あつちの附(つ)り、さるの連(れん)
あつちの髪(かみ)をむづし、あつちの髪(かみ)をむづし、あつちの髪(かみ)をむづし、

造(ぞう)作(さく)り、結(むす)ひ留(とど)り、後(あと)中(ちゆう)の月(つき)あつち、あつちと、
女丈夫(にょぢゆう)の化粧(けいざう)をきこみ、赤(あか)枯(か)て、髪(かみ)を唐輪(たうりん)の髪(かみ)の赤(あか)枯(か)て、

あつちをきこみ、あつちをきこみ、あつちをきこみ、あつちをきこみ、
思(おも)輪(りん)ふとあつち、昔(むかし)を解(と)き、あつちと、

○ 冬(ふゆ)の日、 痕(あと)せぬあつち、痕(あと)済(しま)とて、あつちと、

臨濟錄抄 文 臨濟義玄禪師 西州

南華刑氏の子 幼くして出塵の志を負ひ

落髮 進具 及びして禪宗を志す 黄檗

の會下りて 行業純一 既 黃檗の印

可を受けて 尋ねて 河北の鎮州城の東南の隅に

松の浮沓河の側 臨濟を 小庵に住す 臨濟

地 因て名を 臨東山録 予 政和初嘗

從 石鞮新公 得 馬祖四家録 其後載

臨濟 与 婆子 問答語 婆問 甚麼 麼去

滴云 鳳林去 婆云 恰值 鳳林不在 滴云 甚

麼去 婆便行 滴 召 婆 回首 滴 便行 云

附意 凡 子 ありて 打 女子 云 何 男子 何 男子

亭 主 と 出 たりて 云 志 云 何 男子 何 男子

こ 中 二 び 臨 濟 へ 向 答 一 婆 子 或 曰

吳 必 女 如 子 禪 機 云 何 女 丈夫 去 枯 云 何

と 唐 轡 子 云 何 婆 云 何 婆 云 何 婆 云 何

魁 人 と ありて 月 下 一 砧 云 何 婆 云 何

故 云 老 せ ぬ 云 何 草 庵 集 秋 三 山

おろ 一 ありて 月 下 一 砧 云 何 婆 云 何

云 何 婆 云 何 婆 云 何 婆 云 何

一 つ 臨 濟 の 女 子 云 何 婆 云 何 婆 云 何

何 女 の 去 枯 云 何 志 せ ぬ 云 何 婆 云 何

臨 濟 の 女 子 云 何 婆 云 何 婆 云 何

秋 蟬 の 處 一 色 云 何 野 水

禪 徒 大 海 岸 看 霜 猶 白 空 蟬 聞 色 云 何

志 鏡 和 尚 云 一 つ 蟬 の 色 何 婆 云 何

云 何 山路 一 色 云 何 附 意 寂 莫 云 何

一 つ 砧 を 打 ち 何 真 妙 の 月 一 点 の 雲 云 何

脱 の 蟬 の 色 云 何 一 色 何 大 悟 云 何 殊 云 何

臨 濟 の 女 子 云 何 婆 云 何 婆 云 何

藤 の 実 一 つ 子 粟 云 何 五

附 意 秋 蟬 の 處 一 色 云 何 野 水

○ 冬 の 日

と下下不つらと。一首の哥よきせ。夜更の
地のみまをせし附あり

袂に硯をひきしりり
芭蕉

附註 妻の座を物とて袂に硯を水とあてま
此の掛の空子常のつらき落し硯の硯
万葉 登峯望望同解切石硯瀧壺樂万端

ひしひし典侍の局の内侍
杜國

禁抄 典侍四人也此職尤重製内侍六人此内以
内侍一為勾當 古注曰 平家物語 建禮

内院西海より降りりひ北山最芝院不傍の菴を
いて典の阿波の内侍と侍りおこなひきき
りつて又治二年四月後白川法皇御幸すし
院池水にけの櫻をさき波の流るるまは
作製身は二皇子路殿而執筆ありきて菴を尋
わりて女院いままであやの老尼居らん法と
りふ故小御言依西の娘阿波の内侍と申しさや

ありて山の上より皇孫の元二入下つをみんと仰れ
老尼候をきて花巻肘コト女院コト
木下殿をさき持つ鳥飼中御言の娘まんの局
と申しもあつた法皇の御言とてせりひ
あの若つと持つ女院又一人にまんの局あの新
もろたつていふ曲の局とて尋ねて支
りてつら粧しを歎きらふ作とて
山けつ袂に硯をひきしりり物くんとて雲水の館
又八連寺師ありてまの(きとて)常体の附あり
故これを阿波の内侍と佐局女院を奉る人と小室小
月入るまのと進一ひ山隠るる寺まんと袂
に硯をひきしりり黒きを搦夫とてこれをもひしり
典侍のるひしりり阿波の内侍とてひしりり
とてひしりり附あり

左右より合せて勝負とありて小鳥合の例に君問兼卷
二十或は禁抄下巻より山陰經黄山有鳥其仗
久二の目

いふ下不つらうと一首の哥よきせせ。寂寥

袂に礎をひききしりけり 芭蕉

附註 香炉の座を物とて袂に礎を水とあへり

此の袂の字は中につらひて落す

万葉 登峯の経同解切石礎瀧宅築万端云

ひくく典侍の局の内侍 杜國

禁叔劔 典侍四人也比職尤重製四侍六人比内以

内侍 為句 古注曰 平家物語 建禮

門院西海より降りり北山寂之院不傍る菴とせ

して典の阿波の内侍と侍りおこなひききし

りつて天治二年四月後白河法皇御幸すし

院池水にけの櫻うきて波のそそりまげんと

作製するに千里小波殿而執筆ありさて菴とす

わらふ女院のいまさであやの老尼居らん波とよ

りふ故小物言依西の娘阿波の内侍と申しさや

ありてふり上りし里原の尼二人下つてみれと仰れ

老尼候とぞつて花笠肘の女院とて

木ノ殿とて持て鳥飼中細言の娘とて

と申しもあつた泣いたる白ふん

あの若つと持て女院又一人にさすのるあの新

まらたが

Handwritten notes in smaller characters, likely bleed-through or additional commentary.

三々の花鶴 尾ふかの鳥いふ 座五

三々の花三月三日花鳥軍小鳥合の世よめはま鳥を

左右に合せて勝負をあらまや小鳥合の例君問巻

久二の日

如鷗青時未曉人舌能言名鷗鷗一云今鷗
 鷗と鳥鳥他國ハ心江戸ハ浅草諏訪
 所より鳥屋子ていさり子料足ていさり
 もまら故めつじともあそむと元禄年間船
 来稀うじや **風俗文庫** 百鳥譜考云あつじ
 思ひを忘れたのよりの國ユイナハアハル
 しんれ云 **和漢子園會** 格も子練鷗大さ鳩の
 如し伏山鷗に似て斑紙黒はて黒き帽の如
 胸枚灰色背青く尾碧く長くその中
 二尾最も長し一尺を端に白く圓環もち
 てもさる。甚美し。嘴脛灰黒色雨やんと
 ず。群とふる声短く。その飛ぶと遠くん
 関東の山中より多し。畿内より曾て人を
 見と倍啖て尾長鳥とらふ云 **附言** その頃
 稀ありとと東師いめつじ尾長鷗とを左
 より持て、勝負をひくお官女といふ典侍の

局り又いさり内侍と他よりいさり。此の蓋
 三月三日開鷗の遊い。おとハ小鳥合うてまじを
 おくさると官女の儀一たてまじを

いさりいさり越の獨活が 荷子

お宮目出羽より我後へいさり道吹浦つきの街に
 の山中この小社ありとむして大社をハ白髪明
 神。地まの神にて獨活が境地をうて鎮座を。但倍
 にお上りの二神ハ甚ふあり。殊に白髪思つて
 や。もまらハ神軍ありて海陸おやみん。作も
 ましく失す。さるは白髪つては獨活をさむ
 故。獨活がの神とを祈て白髪と歎し。謝
 し。わハ白髪よりいさり。忽ちつじ。いさり軍
 和平より。川雨いさり。この例をうて三月
 三日を祭日とし。中古より大祀おとん。産子の
 老若より。いさり。数百人あり。鐘で
 携へ。知り獨活をさげ。行列をさうて。広ま

○ 冬の日

小くみ終るるを白後（白後）の社（社）檀（檀）備（備）獨（獨）法
 刑の神（刑）の献物（献物）と稱（稱）もり一年（一年）を怠（怠）と
 きに忽（忽）烈（烈）風（風）迅（迅）雷（雷）作（作）毛（毛）を夫（夫）し（し）と志（志）
 るは星霜（星霜）うつらうつら神位（神位）おとろ今（今）僅（僅）形（形）
 くらりの社（社）とていさう祭日（祭日）に俚借（俚借）とて備（備）
 式（式）ののちも人も稀（稀）ありとや。この前の鳥軍と
 ぶつあやあめさまあひまの鳥の神のつらめ
 ともあたまの心のひききく神軍（神軍）とていさ
 のまを附（附）るものこまの注（注）石（石）の解（解）は
 あんを附志（附志）の注（注）はまのこまのつらめ
 神軍（神軍）とていさの船（船）来（来）た高（高）位（位）
 夫人（夫人）のこまのていさのこまのつらめ
 殊（殊）なる軍（軍）とていさの戦（戦）ひ争（争）ふもいねの神
 のつらめあやあめあひまのひききく神軍（神軍）とていさ
 必也（必也）射手（射手）揖讓（揖讓）而升下（而升下）而飲其争也（而飲其争也）君子
 必也（必也）射手（射手）揖讓（揖讓）而升下（而升下）而飲其争也（而飲其争也）君子

とていさ同（同）く高（高）夫（夫）の人争（人争）お祈（祈）ふ。只（只）鶴（鶴）合（合）
 てあやあめ神（神）のあやあめひききくつらめを白（白）後（後）と
 うと刑（刑）の神軍（神軍）とていさのつらめと附（附）る

○ つらめをひく事僅（僅）三十歩

律（律）のつらめを月（月）とて居（居）る霜（霜）ふ 杜國

漢書 人食（人食）復（復）食（食）以（以）六尺一為歩（為歩）古註（古註）霽（霽）のあ
 らんとひ又（又）しくんとひ雨（雨）後（後）女（女）と雨（雨）つらめ六
 一の過（過）後（後）のあやあめと霽（霽）の字（字）彙（彙）子計（子計）反音

和名鈔 孫（孫）愼（愼）曰（曰）
 祭雨（祭雨）止（止）也（也）故（故）とていさ

霽（霽）雨（雨）小（小）雨（雨）也（也）音與（音與）終（終）同（同）漢鈔（漢鈔）之（之）久（久）禮（禮）云（云）
 霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ

霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ
 霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ
 霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ

霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ
 霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ
 霽（霽）雨（雨）の霽（霽）の字（字）形（形）と相似（相似）とていさ 誤（誤）りつらめをいさ

水（水）のつらめ 重五

小きみ終るそのうとを白髪しらげの社やしろ檀たん備び獨ひとり活
 所ところの神かみより献物けんぶつと稱なづまり一年いちねんこゝを怠おぼそと
 きに忽たちまち烈はげ風かぜ迅雷らいげんして作なもを夫つましりてを志こころ
 るは星霜せいそううつうつとて神位かみおとろふ今いま僅わずかも形かたち
 くらゐの小社こやしろとていさゝり祭日まつひに俚借りせうとを備びず
 云いふののたゞる人も稀まれなりとや。よ前まへより鳥とり軍ぐんと
 つつあやあやめまはる。よ鳥とりの神かみのつゝあ
 ともあたまこころのひびきより神軍かみぐんとこゝろこ
 の更さらを附つくものこゝろの注しるの解とく
 あんを附つき注しるまゝにこゝろこゝろとらふある
 玉たま神かみとて如ごとくそよめあはる。船ふね来きたりたはる高たか位ゐ
 夫人ふじんこゝろをや。よ武ぶ載ざいの也なり士しよる。よるものも
 殊ことなる軍ぐんとてこゝろを戦たたかひ争まがふ。よみねの神かみ
 のつゝあやあやめまはる。よ鳥とりの神かみとて
 必かならず也なり射や手て揖やく讓じやう而して升あ下り而して飲のみ其その争まが也なり也なり君子くんし無な計けい争まが
 必也射手揖讓而升下而飲其争也君子無計争

くらゐの鳥とりの神かみとていさゝり祭日まつひに俚借りせうとを備びず
 云いふののたゞる人も稀まれなりとや。よ前まへより鳥とり軍ぐんと

必也射手揖讓而升下而飲其争也君子無計争

必也射手揖讓而升下而飲其争也君子無計争

内案

附意 浮雲を月こみしゆきうけて 朔と降る
一寸雨の足とく僅二十歩杖をひくもついで
うけてとくかきしる月光あかりたる氷より
たるる水映上。稲妻のそく。地くもと
ついで附意

齒の木の世を初狩人の矢に負て 野水

附意 齒の木の葉を矢のひそく初狩人と立って
こく氷より早春の景色よりあつる附意。
古産獵師の初狩をよとつて齒の葉。胡麻
うらりていとせの門出をいつくお姿画すけり
と但し獵師とさめてふさうなるの附意
あつる

北の御門をあらあけのこる 芭蕉

新古今 天の戸をあらあけり月とんかうき人
しとくこひくうらるよき人あつる 拾玉集
棟の戸をあらあけり空おけて庭白こころ

雪うらりりこころ弄は本つきまのう作あつる

附意 やんがとふき油方の初狩り出りつるさまふ
ころ南門の初春の礼式も出入りけくを障
しあへに北の門をあらあけて出るさまふ附
り附意 禁裏御所は武官公事の狩と勤
ころまといふいふいふ公ま根はさまふ初狩の
まといふ

馬糞拾 ありつる風のあつる 荷守

能誂梁心録 馬糞拾具は竹を扇の如く骨組
て其の秋の作る口は鉄又を打鉄の如く柄を
ふら倍まじりヨキリとらふ扇いれをさすさ
し 附意 北の門を立出て田圃のくさかん
ころ 又馬糞拾もつる扇まじり風のあ
まといふ初春のけりさすさす附意

冬木の陽者どくむ野の圃を英 正平

附意 馬糞拾ありつるさす風のうらりつるさす

○ 冬木の日

ゆるりたる春の日は。茶の湯者野遊ひよ立いで。
いよ蒲公英を野づのさきもさるをりき又
よとふひるさきも附し

らうらげは物も娘のすきて 重五

らうらぎに常痛めて昔常の多きをさるあ
つた人の憐のつもの故轉りてつりゆく

あひひくもも意よりつりつる大切

巻ひ育つてふ **附意** 深寛人ともつて物に

しきをさむ心娘の氣をささせしとこり

出入の茶の湯者をよむ例の輕口とらよせてき

のふ野遊ひよつるが蒲公英の花をさる

この在よさるせんは娘の氣をささせしとこり

ついで野ぶらまをいをささせしとこり

附し

燈籠 ちりよたをけりてらる 杜國

附意 物語文よを好むとある娘の心さ容兒

さへ優よりつるはれんがも男二人をさる燈
籠をさるつるをづれの方をささけりて
らうらぎに附し古註大和物語よをさる
生田川の舟とつりてつる杜國の燈籠の句
をせし時翁とつりて白河の舟とつりてつる
よせしと杜國曰おとつるの絵よりつる
と翁とつりてつるつるつるつるつるつる
つるつるつる

つる秋のすもも力を撰むんせ 甚蓮

後拾遺 秋月よをねとつるつるつるつる

たか野田よつるつるつるつるつるつる

うつるつるつるつるつるつるつるつる

つるつるつるつるつるつるつるつる

つるつるつるつるつるつるつるつる

つるつるつるつるつるつるつるつる

つるつるつるつるつるつるつるつる

まきふりつれをまきふりつれとてまきふりつれとて
の燈籠工のつれまきふりつれとてまきふりつれとて
へてまきふりつれとてまきふりつれとて

〔秋〕 芳麦さへ青 滋賀平の坊 野水

江州信楽南のこし伊波の方より、神龜十五
年十月聖武帝行幸ありて僧行基さうぎ盛さか

舎那しゃなの金銅大像おほぞうを作らしめ、同十六年土師工
くくつて大佛おほぶつを立ぬ地あり、山中あり、富鏡とみかざり

屋やうく茶ちやを作し、陶器たうきを制せいせし者あり。寺てらに
まきふりつれとてまきふりつれとて、景物けいぶつ郭公かくこう鹿か。

紅葉こうじ 新抄しんしょう 志しくつ外山がいざんのりくつとて、
さしきくつとてまきふりつれとて、如法にっぽう法師ぽうし若考わくかう

すくつとて、華はの黄わう房ぼうせふとて、ふん、若考わくかうに
諸木しよぼくまきふりつれとて、彼か存ぞんまきふりつれ、黄わう房ぼうまきふりつれ、

若考わくかうまきふりつれ。まきふりつれ、景物けいぶつとて、紅葉こうじは日
ぬのほどありとて、作意さくい 附意つうい 萩はぎのつゆあり

いふ庭にわを信楽しんがくの坊ぼうとて、附つあり。蓋あふ高たか時とき萩はぎ
をさへ、寺てら。信楽しんがくまきふりつれ

朝月夜あさづきよ双六ふたごの坊ぼうの旅たびにて 杜園とゑん

〔附意〕双六ふたごの坊ぼうの旅たびにて、まきふりつれ、景
物ぶつとて、紅葉こうじまきふりつれ、まきふりつれ、若考わくかうまきふりつれ、
まきふりつれ、まきふりつれ、朝月夜あさづきよまきふりつれ、心こころも
まきふりつれ、まきふりつれ

紅葉こうじ 買かららまきふりつれ、まきふりつれ 荷に分ぶん

〔附意〕双六ふたごの坊ぼうの旅たびにて、まきふりつれ、景
物ぶつとて、紅葉こうじまきふりつれ、まきふりつれ、若考わくかうまきふりつれ、
双六ふたごの坊ぼうの旅たびにて、まきふりつれ、まきふりつれ、まきふりつれ、
細工さいこうにて、機はた織オリとて、まきふりつれ、まきふりつれ、入用いりようの紅こうとて、
まきふりつれ、まきふりつれ、道みちとて、まきふりつれ、まきふりつれ、
まきふりつれ、まきふりつれ

〔附意〕志しくつ外山がいざんのりくつとて、まきふりつれ、
まきふりつれ、まきふりつれ、まきふりつれ、野水のすい

まきの日

有用の紅くんと立つて道にほくまんき、
るるさす子附く

命婦の君より米ふんども 重五

禁中が宮仕する官女の五位は叙しつて命婦
といふ **林王抄** 申膳内侍不着物類也若
是号命婦云 ことばにおこまの上を思存る詞

附意 世とてふまの業しを継を伴ふ所
深泊の身を育んと命婦の君より米ふんども
せしむるさす子附く

まろき、まろ津浪の水こころ行 荷子

附意 親まろ津波の水こころん 見舞とて命
婦の君より米ふんども附く 何れ日大伴白王子の侍

周礼 切子壺氏注云 瀬之箭書夜共百刻冬夏
之間有長短焉 **枕** 以是の供の人もの咬りてもの
ちのひしは方藍日何んか説る附意工粗あは
といふはすは飽にさすまへす例の杜撰す

佛堂なる奥解き 芭豆

魚ふぐとい魚の腹を切裂く **在子** 庖丁為

文惠君 解牛 ち古註 讀州志度の浦長田の作平

惠空上人のまめりて一心念佛の行者とてしり

或時志度の浦津浪のまろ浦 ちちまろ 鯉の腹

惠心の作の彌陀佛とてさすま書撰抄とてさす

ち又武州 鮫洲の鮫も 鮫の腹よりしりて江

戸砂子とてさす **附意** 津波のこころあはけ

しりて 魚の腹より 佛堂とてさすま附く

縣 ちちまろは次郎と仰る 重五

吏登曰 ちちまろは日向のちち何次郎とや

ちちまろは若かりし近国より沙汰まろ厚の花

をを推して名をえん人つてまろ。まろ後名

といふをさし次郎と仰せし。野うへ 田舎の

古といふまろ **附意** 奥の腹をさす佛

像とてさす人とて見次郎とてさす。清まろ

○ 冬の日

有那の結くこと立りて道にほくまらま
るるまら子附る

命婦の君より米ふんじま 重五

禁中子宮仕する官女の五位に叙しつて命婦

と云^レ林正秋抄中鴈内侍不着物類也若

是号^ス命婦云 ことばにおこまの上と思存る詞

らる。附^キ世をそのふよの業とて維を作^ル所

深泊のふと夏人と命婦の君より米ふんじま

せしむるまら子附る

まら子附るまら子附る 荷子

附^キ親まら津波の水こくくん見舞と命

婦の君にみまら子附るん 何九日大伴白王子の侍

りし十寸鏡お大伴の白王子と身して鏡は御侍

るのひ居るのり中まら子附るん吹かてもの

浦よしくみれり。市供の人こもよとてつくつく

ありひしや青藍日何人の流る附^キ粗あら

といへも十寸鏡にまら子附るん杜撰云

佛堂なる奥解き 芭蕉

魚ふんじま魚の腹と切裂^キ 在^リ子^ノ庖^下為^ス

文忠君^鮮牛^ニ ち古註讀州志度の浦長田の作平

惠空上人のまら子附るん念佛の行者と云り

或時志度の浦津浪のまら子附るん鯉の腹

惠心の作の彌陀佛と云るん書撰抄に云る

ち又武州鮫洲の親も鯉の腹よりつと江

戸砂子と云る 附^キ津波のこまおあけ

れんる魚の腹に佛係と云るんまら子附る

縣^ノ子^ノまら子附るん次郎と仰るん 重五

吏登曰^ク次郎と日向のまら子何次郎とや

あまらる者ありし近国よりゆきまら子附る

を推して名をえんるまら子附るん後名

といへもまら子附るん次郎と仰るん 田舎

古といふまら子附るん 附^キ奥の腹と云る佛

像と云るん人と云るん見次郎と云るんまら子附る

○ 冬の日

魚の腹と切裂 在子ノ庖下為ス

長者とて附

春 五形董の 白田六反 杜園

けん花の玉西樓の野菜譜の碎米齋とてひ又若子園圃
傳の榮とてははの屋言連花年とて又カモトウ或はダブ

不の地を附意をん治ゆとてと風雅(五形董とて)

せの山(六反とて)分限のさよとてせの附

うけけの響の雨を産らるる 世蕪

附意けん花董の咲まうたる歸の雲をの

いけのさつる長田ふる景色とてせの附

有六反の馬のわらふん也 野水

附意雲をさつて七反ふる真倉の比の鳥を

わらけり白のわらふとて附

とらさきや矢勿の橋のふきま 杜園

三川岡崎矢勿の橋、東海迄の事。長さ二百八

間をてて附意矢勿の橋のふきまとて

つ流のわらふらふ。有六反の馬のわらふ白

ちを馬士のいう来る驛跡のさよとてせの附

庄屋の松をよとて送りぬ 野水

古註曰矢勿の庄屋の松、世に志らくし松をて旅人
の業ゆとてせの事、もき保年中焼失して今に

ふし之附意矢勿の橋を流る来(旅人名子

きとて)松とてとて押(とて)のいきまのい

旅放哥のよとて送りしとて附

捨き柴刈長のひつん 野水

附意庄屋の松り再よとて送るるけ、我

の廻りて子を捨(時)も。生さきをあらとて松

の折まてて人おき(お今)此柴刈長のひつん

しつとて附

晦日をさむく刀賣の年 五

○ 冬の日

附考 三十日の諸君にびさうつり。秋夜の力
と交りてつくし、あつちやう我いふは、薄命まで
その大年も、疑難困窮か、八十一年以前
巻首のて推し、も、柴舟、舟子のひつん
と、ちやうげく、負かぬのさまで、さう附考)

雪の狂兵の國の笠ウツしき

荷弓

唐天聖間僧可士送僧詩云一鉢印生涯隨
縁度歲華是山皆有寺何處不為家
竺重吳天聖鞋香林地花訪代年禪

室寧憚路岐賒 附考 晦日とわく刀

賣つてつ、い、承、郭の人の氣、あ、有、道、の、士
の、陋、老、の、時、節、と、俟、浪、の、境、界、と、う、あ、り、
同志の朋友大年といつとも雪の狂二乗一訪ひ
ま、の、と、う、ん、と、門、カ、じ、久、出、吳、の、國、の、笠、ウ
つしと、さ、子、海、子、宮、の、故、可、士、詩、で、西、夜、と、
つ、さ、ま、ふ、付、く、)

襟は高尾、斤袖をく 芭蕉

高破は江戸新吉原三浦屋の遊女あり。碑と老人
杏園の尾老、本つ、古書を、年序
定らん、を、問、ふ、高尾、の、名、を、つ、く、者、享、保、十、九
年、迄、二十、代、後、つ、て、貫、後、に、絶、つ、て、し、れ、る、中
み、名、妓、の、ま、こ、と、あ、り、二、代、目、高尾、あり、こ、れ、を、高
高尾と、い、は、し、三、谷、春、慶、院、境、内、ひ、く、の、方、上、墓
あり、万、は、三、年、二、月、三、日、没、行、年、二十、三、歳、法、名
轉、善、妙、心、三、代、目、高尾、醒、と、名、の、者、延、宝、
四年、卯、本、志、づ、め、名、今、年、こ、け、の、ひ、も、あ、り、貴
文、の、末、と、さ、う、し、経、つ、て、さ、う、く、天和、三、年、字、本

此字の一本 高尾小笠原今、あ、り、と、あ、り、天和、の、比、中
絶、し、つ、つ、あ、り、と、つ、つ、あ、り、の、高尾、何、代、目、を
さ、う、て、し、つ、つ、あ、り、と、つ、つ、あ、り、の、博、海、の、ま、こ
と、あ、り、高尾、あり、又、附、考、さ、う、あ、り、と、あ、り、
雪の狂二乗一と、ま、の、者、高破、と、あ、り、吳、の、國

○ 冬の日

の笠ウツし 可なり詩を洒落しついでふふ。
襟もときふん片袖とく 襟巻もきふふ。
伎榭全盤の体にくをせせし附る

あゝ人と樽を棺に春ほさん 重五

晋書列傳曰劉伶字伯倫沛國人也身長
六尺容貌甚陋放情肆志常乘鹿車
携一壺酒使人荷鋤隨之謂曰死便埋
我 人心のろろいやまきをふ 後撰

お人の心秋のつゆをさすも色をさすも
知るまふ 附意 片袖をさすも男の襟巻をさすも

せこの上にあゝう人と樽のあゝまて酒のたの
し〜〜死をもろもろのゆを棺にさすと
ふさす附る

おろ子のひとをさすも禪 杜因

附意 お禪をさすはて人の死にまの聖果子のた
かふかふと用と悟りてんかかせし何執者

さるまゝあゝ人と酒のまて死に死ねさる
格と格とのまさとと 生悟の分別を。名をさるも
禪といふ

三月月の東に暗く 鐘の聲 芭蕉

附意 西のりのまび〜三月のまび〜鐘の聲も
無常をさる折る。まの聖果子のあゝまてあゝ

ふ生死ま〜の如と生悟し〜

さす附る

秋湖のまき子琴久也 者 野水

莊子 孔子削然反琴而弦歌之注曰反琴者
再取琴而彈之也又反琴者琴子久也

附意 三月のまび〜

東のまに既まきあんと〜入相の聲も秋の
哀をさる〜黄台叶湖上まき子琴のまきこ

やま〜附る 杜因 夜聞 葦葉 滄江上

こは待ま〜む〜風情時々

○ 冬の日

言ふこと変じやうして世を渡り

杜田

白虎通 琴禁也 禁止於邪以正人心 **凡俗**

琴之為言禁也 雅之為言正也 言君子守正

以自禁 夫以正雅之聲 劫感正意 故善心勝

邪息 林示 **附意** 湖上ありてきこゆる 琴の音も

正意初きて 殺害の邪念おこるべし 終日釣こめり

奮の道を行くありて 附意 因云 千夜も昔聞

集博雅 の三位の歌は 盗人入るるなり 三品板下き

の下に逃くはる 盗人入るる中をさるる 盗人

さるるものなり 皆くさるる 華樂ひとりて置物

の厨子に 盗人入るる 吹ぬるる 盗人

さるるよきとて 感懐の堪なく 帰るまゝてりや

只今の出来果の者を 承りて ありて 尊くと思

心さあめりて ぬ取とらぬものも 返して奉之

しとて いて 不置て出たり 正雅の色正意を劫

く感ぜしむと 子誠ありて

聲よき念佛 救をあらわす 荷子

附意 声よき念佛の 救をあらわす 何と

なく 善提心を發し 釣ね物 道とくあらわ

こころまじり **附意**

おげのまき竹 燈けし 起倦て 野水

附意 藪のあふとの 某のまき竹 声よき 枕念仏

よ目さめて 雨のうけし 行燈の影も

うま 死人のまき竹に 何となく 気味よく 行

燈けし 起倦て 附意

おもひのこも 夜の帯に 重五

附意 帯に 帯のこも 行燈のかけを 何となく

気味よく 帯に 起して おひのこも 男

の帯を ひき 起すまじり **附意**

ふかれぬは 花のうけ 荷子

伊勢物語 おひのこも 荷子のあふん

夜ふく 之にたよむ せよ **附意** 帯の

○ 冬の日

その望の目を泳もぬれ

芭蕉

山家集

山家の花をよめるころに

あつちんあつちん「あつちん心こも山家ちりふんのちをネリ」**扶桑隱逸傳**

西行曰和歌に禪定の修行あり吾和歌よりして佛法を得る常より涅槃の花の下に死すんをを終ふ仍て和歌を白わたくし花の下を春死あつちん時おの望月のころ果々建

久九年二月十日卒ま**附考**たよりひたのりてを西行の奇よりその望の目を我おれど花の下を死んと西行をよるふさより附

○

たふは博ふあり大徳家

あつちん

山家愛れあつちん黒くぬめ 重五

万葉 野人若くはにやらんかおの妻こそ常のめいさしに奇拾遺人ぬき**百意** 夫くを燃たいと妻希色白くめつじことあま妻のうへ炭家あいの妻こそ黒くぬめとよ作ま

いとの粧ひを鏡磨寒 荷子

文安室徳のひの依とふ七千一番職人尽く載る鏡磨名又そのぬの古前とをさるる鏡磨いこふ両肌をあげた故より子磨寒とよ或人難くを白寒とよむとよは片言うめんや春日寒とよむとよは原本のよ假字に粧む肌さしの類より子細し**附考**山家のあり妻こそ黒くぬめとよを服の作者よりけりよ鏡磨人のためは肌ぬきて寒をよる

○ 冬の日

も道理をうとる挨拶の附あり

○ 花鞍馬骨の霜上咲く了 杜園

戦国策 昭王賢即位卑身厚幣招賢者 郭隗曰臣聞古之人君有以千金求千里馬者三年不能得涓人言於君曰請求之君遣之三年得千里馬馬已死買其骨五百金報君君大怒曰所求者生馬安用死馬捐五百金涓人對曰死馬也市之五百金况生馬乎天下必以生為能市馬馬至矣於是不足者年千里馬至者二今王誠欲必致士請從隗如之 古事 諺 涓少細言老臣零落せられし事若殿上人ありて車して彼家の前を通りぬ家の傍も殊のかり破れ壞れし事なして少細言も無下りことありけりし車のゆありし事をささるるなりし

簾をさしあげて鬼女のくらの如き女法師 顔きくしと 駿馬の骨を買ふやとひひりし 此の故まも 涓少細言を馬骨とりて普通の酒 落ありしや。猿猿表集。女郎花ねびぬ馬 骨の安くととあるなり。句意を括するに女郎 花のちをささるる事。涓少細言とては 此の作意。されば馬骨、涓少細言とては 句意 涓少細言の馬骨を買ふやとひひりし 句意を 零落の面をささるる事。 蘇の霜中より 花をささるる事。 蘇の霜中より 蘇の霜中より 蘇の霜中より

附意 人の粧いと鏡磨寒とては枕草紙あり

身うげをひぬぬその人を涓少細言とては附意 此れも打越し妻と子人倫の事あり。故 蘇の 霜中より 蘇の霜中より 蘇の霜中より

とソノ一は程檢山家の体と木の降とては猿猿表 意残りて一句は首尾ありし事を未煉の作者習ひ

ふくまき時二句の首尾よりひて切字なき發句 ところ。等三の正格を失ふ故に留めたりし

者一郭隗曰臣聞古之人君有以千金求
千里馬者三年不能得消人言於君曰
請求之君遣之三年得千里馬馬已死買
其骨五百金報君君大怒曰所求者生馬
安用死馬捐五百金消人對曰死馬也
市之五百金况生馬乎天下必以生為能
市馬馬至矣於是不足者年千里馬至
者二今王誠欲必致士請從隗如云古事
諺清少納言老ね零落せられし若殿上人の
まゝ車して彼家の前を通らん家の傍も殊の
を破れ壞れしをうんで少納言も無下りこそ
あつけんと車のゆゑをりふとささぬのわい

蕭々々々あけて鬼女のくらの如き女法師顔
うらうらと駿馬の骨を哭かやとひひり
この故文も清少納言を馬骨とりと普通の酒
落ありしや。後猿蓑集。女郎花のひぬ馬
骨の安ふととあるや。句意を按き。女郎
骨のたをる。あつと。清女。年。ぬ。字。あつと
の。作。ま。あ。さ。れ。馬。骨。清。女。と。さ。さ。る。句。意。
清少納言の馬骨を哭かやとひひり
零落の面をうらうらと。蘇の霜中より
花~~~~~と。蘇言喻の作意あり

附意 人の粧いと鏡磨寒と。松草紙あり
あつとあつとぬ。その人を清少納言と。附
たれも打取し妻と子人倫のささる。故。時。言。喻
の。う。を。て。あ。つ。と。ひ。ひ。り。凡。才。三。妻。を。強。く。さ。り
お。し。を。定。格。と。は。故。花。蘇。馬。骨。の。霜。を。咲。り。了
と。ソ。ソ。松。檢。山。の。体。と。木。降。と。ソ。ソ。猿。蓑

意残りて一句は首尾あり。まを未煉の作者習ひ
ふくま。時。二。句。の。首。尾。と。り。ひ。て。切。字。お。き。發。句
と。さ。り。三。の。正。格。を。失。ふ。故。ま。留。り。或。は。て
或。は。引。ち。の。キ。ル。波。ま。て。留。ま。と。仮。工。教。を。た。て。れ
か。い。の。こ。つ。手。ル。波。ま。て。留。ま。と。き。い。か。い。ひ。あ。く
句。作。ま。し。も。お。の。つ。い。意。の。こ。つ。下。句。こ。お。う。か。り
あ。い。は。つ。ま。い。の。文。を。あ。つ。と。押。さ。し。め。れ

のこいしう〜とてふは、留て留ての文字
コリキハ〜とてふは

鶴正の月のまゝ 野水

附意 常の鶴正の宮子ノ景をふむは、二日
の月をこゝろの清少納言草庵とせし
附意)

のせぬ秋の瓶の酒をさる 芭蕉

昭明太子の酒明傳 嘗九月九日無酒出宅 菊
中坐久之出 手把菊 忽值王弘 送酒至 就
酌醉而歸 云 自氏文集 家醞瓶空人各絕

附意 鶴正の宮子ノ月をさる〜とて酒明感
乐天如き酒客の隱者の草庵とてし 秋の日は
ら風とてまゝとて種ふは 壺觴を引て酒を酌んと
ふ折りく瓶の酒をさる〜とて附意)

萩蔵のり〜とて市小 振る 羽笠

日次紀文 御火燒の冬云先朝日 稻荷神天子見

童謡 小神輿 御朝日 振市中 八人 家語 未幾

之振る 神輿を振る 御朝日 振る 御朝日 振る 御朝日 振る

附意 常の春云〜とて 阿部蹄の云とて 兼好
進徳て云〜とて 或杜詩 年光元酒 便之日 併因

疏 課云註 謂 督課 國疏 變以供 沽直
之 四の 隱者の 依とて ありて 酒の 心 錢とて 八

八 萩正 作 したる 笠を 市より せや 懸望する 者
ありて 酒を 替て 末とて ありて 附意)

加茂川や胡磨千代 雀の 微近し 荷弓

部搜 加茂川の上 稻荷の社ありて 神のこのま
ありて 酒の ありて ありて 黒胡麻を 植ふ 桔

末社 ありて 九月上の 午の日 酒の 祭ありて 瑞芳 藍白

○ 冬の日

同、雍州府志、見次、死、夏、山、川、名、跡、を、この、葉、師、の、古、又
を、記、せ、る、書、と、を、い、ふ、子、胡、麻、千、代、祭、と、は、神、祭、さ、ら
ま、ん、え、ん、だ、ら、し、上、り、祭、つ、る、夜、も、何、の、書、も、聞、く
し、る、あ、る、書、由、南、曰、胡、麻、千、代、祭、と、は、神、社、に、つ
け、り、あ、り、也、と、上、加、茂、下、加、茂、の、間、を、一、日、と、う、搜、
ふ、れ、も、村、民、あ、る、人、ち、き、故、社、を、あ、り、尋、せ、り、し、ま、り、
け、と、り、今、も、の、跡、絶、し、り、也、と、を、書、す、と、之、後、
年、同、既、に、絶、て、土、地、の、村、民、の、い、ひ、つ、く、と、は、住、古
の、神、祭、を、め、り、し、と、作、り、つ、く、と、を、い、ふ、趣、向、あ、り、し、

附志、萩、萩、萩、と、を、市、つ、り、つ、く、と、は、隠、者、の、言、花
を、洛、北、と、い、ふ、胡、麻、千、代、祭、も、や、近、く、と、噂、さ、る、
さ、ら、う、附、し、

い、つ、く、の、舞、あ、り、し、の、さ、ら、
重五

拾芥抄、山、岩、倉、王、城、在、四、方、三、雍、州、府、志、古、蹟、城
鐵、道、の、あ、り、終、を、平、安、城、四、方、の、山、上、に、切、り、是、を、
岩、倉、と、号、す、東、北、西、に、今、も、の、所、分、明、寺、南

ヤハ
カハ

方、其、處、を、詳、さ、る、と、は、岩、倉、四、方、の、山、上、に、切、り、
成、り、附、く、と、北、岩、倉、と、い、ふ、也、北、岩、倉、松、の、寺、の、西、
あり、ま、り、監、曰、予、壯、年、の、時、峰、山、と、い、ふ、也、國、圖、書
洲、良、教、子、と、和、奇、を、よ、し、又、俳、語、を、遊、ぶ、或、許
岩、倉、の、舞、も、予、つ、ふ、田、植、を、つ、く、と、い、ふ、也、
予、岩、倉、の、舞、と、い、ふ、と、あ、り、し、つ、く、と、は、予、と、舞、の
は、峰、山、曰、昔、岩、倉、を、遊、ぶ、者、を、古、と、再、り、也、と
い、ふ、と、は、客、を、遊、す、と、い、ふ、也、洛、の、人、を、遊、す、予、を
と、い、ふ、岩、倉、の、舞、と、い、ふ、と、い、ふ、也、吾、師、野、洲、良、大
人、と、い、け、り、故、に、岩、倉、を、遊、ぶ、者、も、良、大、と、由
植、を、ま、つ、り、し、り、と、い、ふ、と、い、ふ、也、ひ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、

は、の、後、の、の、の、解、に、便、り、あ、れ、は、そ、の、時、と、い、ふ、と、い、ふ
は、の、の、の、の、の、の、時、の、茶、漏、を、今
と、い、ふ、海、の、の、の、海、の、の、國、圖、野、洲、良、國、新、記、の
注、者、と、い、ふ、名、可、古、跡、と、い、ふ、殊、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

○ 又、この、

一を載る男胡麻千代奈と云く之様年
 向は絶て志す人もあると作者重五古書に記す
 てこの故耳ゆづりしきをせんとしてかく作らるる
 事なり。但しこの後南子と云く胡麻千代奈
 八四月の回くく古注「男の愛情」にて
 奈はこゝろの音も来る。この注はすな
 いらつゝの比と云ふ所の長きことなりゆれ
 比の時節と云ふ事あり。

附志 男女うち交りて布搦中 岩倉の音
 ありの比と云ふ男もたやりの男の更を寄り
 して笑ふも。女もめりさきま附たり

山音休長士待奉 大醫孫君助自早 四休長
 三平 杜國

士山音問其故 四休笑曰 鹿茶淡飯飽即休
 補破遠寒暖即休 三平二端過即不食
 不妬先即休 山谷曰 此女樂法 三平二端ハ
 ちつゝの如き終るる故 三平と書てまゝか
 とよませるる當の洒落なり

古今 序をよみて 一のうをわの 宣長
 誰とわると思 趣うくく身も 附志 二

八の若もいつらとて ちつゝを敷く ちつゝの
 女の男も捨くくわくくわく ちつゝの 雀鳥も
 てん作多あり

火おぬ火焼ちん 芭蕉
 附志 夫ふく人しし ちつゝ大煙と云く

ちつゝ故火おぬ ちつゝ死別れ ちつゝの
 〇 冬この日

さて冬より夏まで一くささま聞かす
覺り細豆たきしもの [細豆の音を]
こゝろ鉢たきとらふ翁の白身

て飛ぶ遠梅の熱とあまらるる 芭蕉

錦浦段 哭花詩云 會愁香綺破 顔暈今日

妖紅香地 叶有清香 予不哭 夜未風雨 菊

西施 央景陽云 夫木深著於五欲 如猫牛

變尾 一う砂のをの極と 芝もやり 龍

一色うめりける 佐成卿云 附意 花のうらみ

やまぐ 或は夜曲の光り くらげとあまらるる 芝の

て花の泣し 本末無一物 色即是空と悟る

ぬれぬ木より生 一なる 徳あり する 假の有相

一念ととの色香を執着せし 我ふらる

愚ふりしと愛着と捨てる 春と夏のつけで

思ひ 一隙ゆく 駒の足がくくゆく 夏もあまらる

秋も長月の末より 冬より 細豆たき 芝よ

よわ
ぬま
あふ
あふ

とやけのうらみ 龍柳をまらるる 芝の附く

新古今 三つのまもも 子にぬれぬ 山に九らき

花のうらみと 一 具平 龍王 津の島のうら

この春のゆめや 花の枝葉は 風をうらむ 西行

さくさく 吾と同意の 附あり 熱の書 換とす 何

な 花のうらみ 一 花の熱 一 一 待を 止す

一 一 七部の 住し 心あり 叶 故おのえ 今 搜索

まらるる 追ひ 来れ 心を 神

傍りのうらみ 歎冬を 吞 羽笠

古く 龍浮寺 山吹の花を 色ぬれ やる 水ととらる

口を せめて まき 性 一 の 弄よ 山吹ともの しのめ 芝

よけ して あり 一 一 碧岩集 渾益云 春 筒索

云 注云 遠信 不念 一 花 菜 櫛 底 度 一 而 任 摩

道 如 西 筒 束 束 不 細 喫 一 口 吞 初 二 山 豆 知 其

味 平 一 一 一 葉 を 山 吹 一 替 一 一 作 意 一 一 附 意

花を 執着して 泣くも 悟る 一 一 一 根木 一 生 一 一

○ 冬この日

る徳ありと云ふ白くつるを禪傍りて。汝見
解い東を君一と云ふたつひく一夫物を君却
まらぬの五味を弁せんか。意を荷さんとして
まらぬあひる炭を君て。悟達の早合点と無言
呵々まらぬ炭のさきま附く。 かいまの付あり
作意をさぬ故に古往。吾といふ山吹のつゆり或
下水ふえーと云ひて。山吹の茶の銘と云ひ
或い血まの行僧の水と云ふ人と云ふ。山吹の影の
うつらうと云ふの事。春と云ふ事。と云ふ皆臆後
と云ふ事

白燕濁らぬ水と雨を洗ひ

荷子

詩経 註云色白者數百載燕也 國史 天智天皇

六年夏六月山城國葛野郡より白燕を獻
ふ菅原曰多紀女元法眼の物後より白燕に穢ま
住まらぬ。此後熊本城中より白燕を八ヶ城外へ
出さす。予もてんをくんとくんと云附意花々

椽の徳ありと云ふけつるを傍人と云ふと折しも

世よりけつる白燕庭前の清き流る来りて羽
を洗ひ居る故物も立人んとあはれてもあま
山吹と云てんせ。汝見解 東を春と云ひて
いへまをと云ま。春と云ふと云ふ一まの附 祖庭

麦花 胡釘絞詩 云蓬頭稚子 學垂綸側

莓苔草映身 踏人借問遙招手 喚果

魚驚不應人 云の侍をむく。附意を味は

宣旨のこく 叙を請ひ 重五

洞冥記 漢元年起 招仙閣於甘泉

宮西 神女留玉釵 以贈帝 帝以賜

趙婕妤 至昭帝元鳳中 宮人猶見此

釵 黃謙故之 明日示之 既發匣有白燕

飛昇 天後宮人 學作此 叙因名玉燕釵

之 附意 叙白燕 之 化 湯の水を羽をさし

て終つたり昇りしを帝叙と憎むるや元の秋

○ 冬の目

の如く録しと命ぜられし宣旨の如く叙で
録すまふに附く金宣旨と云く悉く其に同し

八十年と三川入るを母もちて 野水

古註ハのウニ執筆の終りて十年を三つと云ふ
夕日して三十年ふるといひ或ハ八重葎八重垣の
くひよて八十只敷の多々をふといひ或ハ八十年の
向を三つと云ふ意も七十年の意ありといふも後
とを方取らばいかに註して七つの附意と云へて
二百四十歳の長寿の男の上も母もちてといふも
て八十年といつとて冬の日々の曲節と云ふ解
よりし長寿の意を重とては八十三子と云ふ意あり
文帝紀七十八有嬉戯如小兒云或人難し之
二百四十歳の齡いせしやうもあつたこと
答曰十訓抄云武切大臣仁徳天皇五十五伊
小亮元景行天皇より以上六代の朝つて
行年二百八十二歳在官二百四十四年あり云

當道曰法然上人の説とて雜事をあつめし書の中
り大和国竹林の巖上にて勅して神武帝
の叙を録し諸國に勅して百支以上の男の叙を
存し者を召しあつて是を役せしむ是玉叙
を録し例に竹林の巖上極めて天地ふんふん
我くは佛舎を用いんとて款を署す 附意
神武者の定方を定めし長寿の者叙を録す
中より二百四十歳を母もちてせしむるは長
の男のあつたに附く

たつとらむむ七つのつよ 杜園

古註中斷の義つとていふは貞亨の年本
日なりとらむと留考の意あり 附意二百四十歳
の男の母もちてといふを天上皇の者といふは
いふは長年故にふく妻りてせくと七つのつよ

ナカヨリ附く

西南に桂のてふつとく 羽立

○ 冬の日

酉陽雜俎 月中有桂高五百丈之 [古今文]

この月のうらも秋くはもいふからんやあつてま
ささくも忠孝秋くは月のうらぶの意やあつて
桂の花のつぼむと 景織き月をふ [附意]
西南に桂の花のつぼむときセ夕の妻の媒あつて
天界の景色をせし附き

蘭の香のつぼむと木うつ音 芭蕉

楚辞 蘭膏明燭華容備註王逸曰

以蘭香練膏也 [唐詩選] 帝京篇曰

秋夜蘭燈燈九微 云陳藏器曰蘭草生

澤畔婦人如油澤頭故云蘭澤 [附意]

西南に桂の花のつぼむ秋の夜寂寥つ所

も蘭の油と人と木うつ音のうらぶさび

も景色をせし附き

賤の家も賢子女見てく 車五

蒙求 古列女傳云齊閔王之右頸有大

瘤号曰宿瘤初閔王出遊至東郭

百姓盡觀宿瘤採桑如故王怪問曰

寡人出遊百姓無長少皆來觀汝不

一視何也対曰妾受父母教採桑不受

教觀大王王曰此奇女也惜哉宿瘤女

曰婢妾之職屈之不三平之不中心謂

何宿瘤何傷王大悦曰此賢女也命

後乘載之女曰父母在何使妾不受教

而隨王是奔女也王安用之王大歎

遣使使者奉禮加金百鎰往聘

贈之父母為惶惶欲洗浴加衣裳女曰

如是見王变化谷更服不見職也於是

如故隨使者至閔王以為后畧の故まを

附意 子孫の女を祀く

百姓長少とみよしと立出申す蘭の香

○ 冬の日

の土木の考のきこえければ、國君あやしき子細
をとも宿瘤如く對する賢女が一言をききて、人
感にしてくまきま附く

釣籠子粟とあるふりてん 荷子

附記 子の守つてきたる後の人等を山野道邊の
折らざる村の某の娘にまがし中工孝養ふ
りくまづくの行跡ありと人の子者をけんあつ
しきまらる村をぬかれ米炊く桶にありけん釣
籠子粟をりし賢女、立やまひて各感養
て家路へ歸る日の人けし体をきき附く

團 ちや来て撫子び正月り 杜園

梅園日記 亀岡宗山の後見草云宝曆九年夏
の比し誰いしひせるとりまもあも末年十
年の辰の年より三河万歳のうらこ彌勒十年
の辰の年よりあつてこの年、災難おろす一
の難とのかりよ正月のよとぶきをふまよま

まふしと申すしち、是よりして報養といふひ
達兼とつて、都鄙一回のまといぬまの教女
永七年六月朔日は戸まて之と稱していひ。
又文化十年夏の比し、あつてをり正月と
ふひの如く正月の真似をい、夜寝を除くといふ
しつて、**附記**、ちや正月を家毎
に撫子をりし、又餅搗て報養といふと、我家に
つて、糯米の貯こ、ふけれ、せめて粟あつても
つて、正月の真似せんと米炊くも桶ふ
り、釣籠子粟をりし、ま附く

は、ちや向、弁慶の宮 野水

鼓たむく、神乐を奏して神をさむ、**高初謹神**
小飛夜の鼓の拍子をうて、ま、(宮つ、ろを、下
ま、**平泉清盛記**
文治五年、鎌倉、密旨、而、襲、衣川、聖

○ 冬の日

事生不意、豫州自盡、其部下多戰死、龜
井、松、即重保、致命之處、鈴木墓亦在其
側、僧并度之、多刀立死而不倒、至今為
止啼之話、有并度堂、而置其像、**附志**
撫子と云く正月を正し、且并度の堂に神系
を奏し、流行の疫病を止さん、と祈り、**附志**
疫

寅の日の世を鍛冶入志起て 芭蕉

何丸之寅の年寅の月寅のり打と力を三寅
と号して伊豆権理と細のりと云く、さまた、寅ハ
一寸の眼目ありと云**附志**よき刀鍛へんと并慶
の宮に祈を乞ふ、鼓をむけて神をまじぬ、今乾こ
る寅の日ふんと急あきそ、刀打んと云く、**附志**

雲のうらむにき 南京の地 羽立

西のうらむにきと云く、香の煙をふ**性灵集**微風一扇
輪宝幾千香の敷、黒法身用燈之**天木**
よもまゝ、星之の空よこてまゝ、香のけりや雲

と云く、源仲正之、南京に奈良をふ**皇物集**

南京の薬師寺の万燈會之、あ外堵書子**教見**

廿**古語拾遺**夫開闢之初、注之阿女天也

津知地也、奈良の寺院あり、地故云、いふ

しきと云**附志**奈良の奈良刀と云、刀工のふ

く、むの地故、鍛冶のこく、起て刀打んと云く、**附志**

し朝つと云く、香煙をくく、**附志**

いかき、て誰と云く、ぬ人の像 荷守

古注、曰奈良の所を憐て、ふりて、神離ひ、い

言殿の像を、今、所の農夫も、あ若ゆ、**附志**

誰とも云く、ぬ人の像ありと云く、地の榎梅と云

ま、よませ、**附志**

春 泥よこりのうまぐせの根 重五

愛蓮説予獨愛蓮之出淤泥而不染

予獨愛蓮之出淤泥而不染

附 ぎきりたるこの像。喜老の徒をさぐる。
 卑賤の身ぶるも、志誠義膽ありて
 切なる世子のくしん。土人像を作りて死後
 まゝ尊敬しけるを星我うつて今この像
 としよの人みけれど現存のしををりて
 やしきよの泥のまじりて淤泥に染るな井の
 根の如きよ、心あんと井さくしてふむ
 ころまの附

那すのあつた花のしりやい

大開秀吉公木下孫吉印とひて信長公の仕
 時。馬の腰のふし足輕を勤し強氣さう人の
 信長公殿裏のをりもつて毎朝卯の刻より
 越馬に出らぬるふ。雪のいとかり朝廿刻
 をこして起出言園をりかよひまゝ園の居人
 誰ふりともめりあは孫吉印あつてふ。信長曰
 汝一人ふりして早く来りしを孫吉印曰今程の

りあはぬ毎人より一呼あは参上りて君を相
 待とふ信長公ふをさて感しりあは度大開記
 ころまのふ附の故まの件をさるあへ
附 ぎ 那すのあつた花のしりやい。君の
 早出をすつ下部。心泥工生し泥の深くぬ
 井の根のしりやい。と感まのまの附

狩夜の下に鏡の春風 芭蕉

附 ぎ 供のくしりやい。あつた花の下
 ころまのふ。君の立つるあつたをりも狩衣の
 下。鏡着てまつし。と出らぬ出陳の体たくと
 ころまの附

北のくしりやい。簾やうて 羽登

黒住雑沓抄 南に陽あり北に陰。故に女を北の
 方とす。平家物語に松三位惟盛御都を落んとす。其方
 及い公達り別れり。余云中門の廊を鏡ひ取て着馬り
 よせ衆人ども。又北の方。年ころ日さるかくあまは存す

冬の日

人とはをんをうしとて引かきてを引かき若君姫衣
女は遠の御簾の外を帯ひ出産をくくは地めきけ
いふひけりなかに仰よりあたる附附意狩夜の下
籠きて都を度んと立出あつと北の方へ逃くを
やりし又いつか中名残をしく見送りふさす附意
わづらぬ夢を奏るむ雨 杜園

新古今 まくも神よもくつらりてむま
めゆりてとふるふ根政大政大臣 **新古今** 風ふ
けいつゆこもあつ小秋のまよひをぬぬめいつてき
さむじん通教ぶこる哥と同意の句作ち附意
あまのいよえつり北の方む雨を奏るまらんてい
わなまんと寝るねね又むせく悲歎こたかく
兼甲やうて夜話の者あまよひもさす附意

田家眺望

霜月や鶴の行こあひひめて 荷弓
石川丈山冬暖野望詩云南村日載陽

冬 鶴鶴へ高望一冬日野望の景色皆つ多相似

凡眼のなるの意をうけて意を残すも結ひ
留るを定格とせまなすいあくてこそこそ
留るべき意のうけて眼の体をあさま故り
活法の書に字留よりと附意鶴の行
く霜月の景色をせし附意
程橋山家多体を木此葉降 重五

新古今 冬のもきこもあつと木を葉かうう松
さへまふさひき祝部成茂こも哥をうと
うまゆあう **附意** 櫻もあう又橋もあう又雨の
如く木の葉もあう木の立つてさうう山家冬冬
日のあまをいよえつり景色附意

ひまづらりの極にありて 杜園
何れ日本の葉やうとんは白中の風もふくさう
○ 冬この日

凡まむのる牛あれ引つると附る牛の性として風まむるときははらまを故まひきつる引つてゆく牛あれあらはらちの荷ささる塩つこほすに要言故是之牛走噴馬走逆凡之附意山中の之の塩なれ牛の背につけて陰廻の絶をこふ折しも木の葉の降り来り

音もなき具足二月のうもくと 羽笠

雑兵の具足は皆具とくもぬ取り牛いきつとて身をたらしめても袖あひに脛桶あひあふあふをなれ音もあるといふ附意山中の陳屋へ塩を牛の脊よりけて月をけこつて夜をけつたふの附意

碓と音と蘭切し いで 桝水

附意陳中の盛魚は蘭きつてよまへ碓と居る音の可いこと前裁の立てて音と具足は皆具といふぬあふ音もあふ折る雪月の影もいと

さしこつたふの附意

秋のころ後山連馬のころよ 芭蕉

附意やんよとあふは方旅行の酔をんよとといころの式を連奇あり餘魚酒とてあしし誰り庭より蘭切つてよと水意あつけん碓と居る音と立てて音と具足は皆具

漸くともれを富士の寺 芭蕉

足利將軍義隆永享四年九月十日為是言山發京都十七日到駿州藤枝鬼岩寺園主今川範政奉迎十八日登高亭御覽富士贈御詠於范政々々敵返歌附意秋のころ旅の内連

寂しくも格の屋の暗 杜園

寂しくも格の屋の暗 杜園 寂しくも格の屋の暗 杜園 寂しくも格の屋の暗 杜園

○ 冬の日

茶系遊チャケイユをしむ。風の香カゼノカ 重五チュウゴ

契沖新記キチナカニウキ「つれづれなるもの同好するをゆるがはる
者」云々。後「糸の芳義訓」大空に散らすの面白
糸をひくもふ似るべし。正ただ「後」とも「糸木俵
あり」風かぜの香ハ平天詩「風香カゼノカ粟重アヲシ梨花カキ隰シ」
と云々に向く。春の風の和らぎをいふて云々。

茶チャの糸イトゆきをしむと云々。茶の煙カより大空の糸イトゆ
きのいとぬきを 茶と糸の縁キリよりて云々。杜
詩「夕煙セキエン細細サイサイ駐遊チユ」と云々。景色カシキ。附志ツケシ

梧キの花ハナの蔭カゲより不ふの音ネなき寂寥セキリョウたる地チを
このとてこゝろ菴アムしむとひく。隱者インジャ茶を煮ヌくと富トモの下
杖シつくれば凡ソコ茶のけつとてさそひて。大空の糸イトゆ
きを深シく。春の日の長閑ナガシズカなる景色カシキをせし附志ツケシ

維キ退タイ子シ馬バ帽バウの女メ五イ三サン十ジュウ 野水ノミヅ

曲マク齊サイ白ハク維キ退タイ子シと山ヤマ向ムカのなまき地チをまり出デる維
を西ニシより東トウへとませ。東トウより西ニシへして西ニシへた也ナリ遂ツ

小コ廻マヅルつつもも。落オチ伏フスししうをまととうまとと云々。附志ツケシ
園エンの守モリあまの侍サマシ女メ鳥トリ帽バウ子シ行イ衣イまま追オ馬バ狩カウ
の直ナ似ニくくあまあまひひの庭ニワ中ナカよりくくく神カミ理リと
の總ソウいい茶チャをまりて富トモの下ノ杖シつくれば茶煙チャエン凡ソコも
ひきつて糸イトゆきをまととうまとと云々。附志ツケシ

志シ 庭ニワ工ク木キ曾ソウ作ソクのひの薄衣ウスガキ 羽笠ウカサ

附志ツケシ 庭ニワ工ク木キ曾ソウ山サンの景色カシキをまりてあまあまの侍サマシ
女メ維キおおももせせ風カゼ雅ヤ工ク大ダイ名ナの著シヤク修シユをまりて尽ツクし

ううままりて附ツケくく。愁ウレシの薄衣ウスガキと云々。女メ色イロここああわわれれぬぬ買カ買カ
君キミつつとと不フ作ソク者モノ。兼カミももうう庭ニワ工ク木キ曾ソウ作ソクと云々。句ク作ソク
前マエ裁サイ合カのまりてああまあひひとと云々。一ヒト。附志ツケシ

老ロウの波ハの卷マキ云クニ御ミ重シユと云々。せせのひて前マエ裁サイ合カをまりて云々。
ももとと云々。つつままりていいままとと云々。某ナニの朝アサ臣シ

の模モトの島シマのけけききをまりてははりけをまりて平ヘイ大ダイ納ナク言ゴン經キョウ
親オヤいいまま下ゲ藤フジと云々。女メ衛ヱ佐サと云々。ひひけけをまりて云々。ああまあひひとと云々。
その宇治ウヂ川の橋ハシと云々。ああまあひひとと云々。ああまあひひとと云々。

ああまあひひとと云々。ああまあひひとと云々。ああまあひひとと云々。

茶の香 重五

大沖新記 つけろふもふ同物とて幸ゆハ良
名ニシテ流レルコト義訓ハ大空ニ散ラシメ白
糸をひらふに似ルルニシテ後ニとふニ糸木俵
ありて風の香ハ丹天詩ニ風香露重梨花隰
と云フに似テ春の風の和らぎニ似テ云フ

茶の香ゆあをさしむるハ茶の煙より大空の糸ゆ
ニのこもゆを 茶と糸の縁よりて云フ也 杜
詩ニ煙細細駐遊糸」とシテ景色ニ 附志

梧の葉の落るもろくも音なき寂寥たる地を
このこも菴むもびく隠者茶を煮んと電の下
杖又つくハ凡茶のけつとてささしめて大空の糸あ
を染る 春の日は長閑なる景色をせし附志

維退り 馬帽子の女五三十一 野水

曲齋曰維退子と山向のなき地を巻り上り出る維
を西より東と云せ東より西にして西た也遂

附志

茶の香ゆあをさしむるハ茶の煙より大空の糸ゆ
ニのこもゆを 茶と糸の縁よりて云フ也 杜
詩ニ煙細細駐遊糸」とシテ景色ニ 附志
梧の葉の落るもろくも音なき寂寥たる地を
このこも菴むもびく隠者茶を煮んと電の下
杖又つくハ凡茶のけつとてささしめて大空の糸あ
を染る 春の日は長閑なる景色をせし附志
維退り 馬帽子の女五三十一 野水
曲齋曰維退子と山向のなき地を巻り上り出る維
を西より東と云せ東より西にして西た也遂

あつふつき山 橋よさくら見ん 荷草

万葉集より山橋とよきハ新羅子と云ふ人皇
御孫ト牡丹の異名とおんせんニ故より白を
あつふつき牡丹と云く人をひらつこくと云
意ニ注したる回復と云しハハ夏ふつき山
橋と云くこをなす人云と云ふ作意也

○ 冬の日

ハ、夏ふりき、山と白をきくそよむ(一)附
急暖気がうき木曾の山中を伝へたる庭
あは橋と橋をえと風雅な春の風情をき
そよふ附あり

麻子と子壽の集あむ 芭蕉

附意 ありふつき山、橋とさくさくえんとり

風雅なあそびの情故に故き人の人を壽と
者ともふ。麻子と子壽の集あむさきう附

江を近く獨楽庵とせを捨て 庄五

獨樂園記 百馬 二 辻 俊 平日 読書 上 師

聖人 下 友 群 賢 器 志 倦 體 疲 則 投
竿 取 魚 有 何 乐 可 以 代 此 也 因 合 而
命 之 曰 獨 楽 一 云 附 意 くらさく倦と
さい魚をとりてふいさくとはちく菴を
しむひ 獨楽菴と名つけて浮世をまて 麻

くりと子壽の集あむ(一)附

我月出よ身かおろり 杜因

附意 江を近く獨楽庵とせ捨これとも衣束

諒者のあは流浪せし身よれ我邪正をて
らを月出よしと述懐もさきう附

たい衣箱に落花を打拂 羽笠

李白詩 三 对 酒 不 觉 暝 落花 盈 我衣 云

附意 物物とあはし公仰の砒所へやむく
旅中 或花の木陰にはらむ 秋花の笛とさく

一曲ふきりあ折しも山の端より月のかき
つこも今さく都へひく我邪正をてさく

月も出よ身かおろりなるといひつ衣こさくさ
その雪を南うそあささきう附

芭蕉 ゆくゆく木瓜の山あひ 野水

盛久 謡言 軍 一 善 興 一 の せ 云 附 意 田
人の心御よつきえひるるは故園の武士さ

○ 冬の日

まろいしきしつちんりん往來ふき木瓜
く山あひの管輅かろくをえり 群をえり
夕もくしきしつちんりん往來ふき木瓜
吹の衣あつむを服身てふく持りたる 秋菘の
笛もく打てしむりかろくをえり

不女 世月をえりて生し追をうらへり 芭蕉

うちくく 悔天の長しきまてちあまの 倒れ臥せ

まろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

興てあまのれまろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

角まろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

常あまのれまろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

正を照く月出よあまのれまろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

今の艱難を免れんめをえり 四角一考の附き

後ろの 俾人

こし念の裏をいふまのめ 荷子

元亨子教書 世也上人傳之 荒原曠野 每途遺骨

招聚 一處 念彌陀名 灌油 燒過 云か、

休をせし附き 附き 道 道 道 道 道 道 道 道 道 道

の茫のしよ人の骨の身しきしつちんりん往來ふき木瓜

人のまろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

ふく風をえりしつちんりん往來ふき木瓜

昔泉の思をいふりしつちんりん往來ふき木瓜

めり道者まろいしきしつちんりん往來ふき木瓜

いしきしつちんりん往來ふき木瓜

いしきしつちんりん往來ふき木瓜

いととを言り銭やうを裏りしつちんりん往來ふき木瓜

いしきしつちんりん往來ふき木瓜

泥のうら尾を引舞を拾ひ得て 杜国

庄子 楚有 神龜 死已 三千 歲矣 中 筭 而

藏之 廟堂 之上 此 龜 者 寧 其 死 為 留 田

骨 貴 乎 寧 生 而 身 尾 於 塗 中 乎 之 也

○ 又この日

泥の上尾をひくとつと白作ここの本つく **附** 志のぬを出くくく泥の上尾をひく鯉をいろい得んかと持やくき器よんかんとせんとおも折しも煮着るる乞食のまやうけんに表こらるる包んと乞食の表をいひいひ

御幸の進む水のふくま 集五

附 岷江入楚 徳幸の天子 御幸の院子 づれもか ことよむ 附 旱 魃 災 害 御幸の水 毒消除の御薬を 進め奉る折しも

川水涸る泥の上尾をひく鯉を拾ひ得て 上は夏こそあつた 附

是又まての年の小角豆の存る色 野水

附 水の子くまを遊り奉るこま 前白註 かく如く 女屋敷の叶節 故に夏まての年のふんの

在らうと田舎の景色をこゝ格外へ御幸の 附

萱屋まてに炭團つく 白 羽笠

附 萱をまての片屋に夏ほどの炭團つく ことの担根こまけのふらふらたふ日 附

芥子あまの坊文りおむして 荷笠

附 萱屋まての炭團つく白あまのふ芥子坊主の女の子もうちまて子もものむ水 ぬそふ田舎のけーきをまてせ

遊い居るまて附

遊い居るまて附 遊い居るまて附

志川より飯基のそと月ヶ前 産五
飯基の長き板子脚ついで多人数下りて飯
くふ并利の膳より寺院あり用之 **附意** 蓮
のふたつをこもこもしてさめり 暮秋の遊地
のそと宵月夜のみりらまをたふむるや
ふくも飯くらしむしふく来てさめりあふり
基所よりついで故飯基のそと寺院の
さめりてせし附与

露路ゆくき子風やとつり 杜園

附意 まつりて飯基のそと月ヶ前 秋夕
を越ひ狐のなく声うらやむ山寺の物まひり
月夜の色色とりとりたつ附

釣橋工屋根つれり片庇 羽笠

漁材をくつともふく麻糸を繋きさるる股木に渡
りて下り掛脚 乾ききを釣材とよめる釣材
雨感の露をいとんこつめ

片庇を葺く山家のこまなり。この釣材ハ
多く信州より製表也 **附意** 釣材より雨露をいと
ぶく片庇をふくつる狐の尻よりみり
いさ術ふんれい身おくつやをさめりて。つくと
もよ山家体をもせし附与

豆腐つくと母。喪入 即水

附意 釣材より片庇をさるる山家の主人母の不
幸のあい佛前工供の豆腐を年づつ造りて
又喪入つりむさつ附与

元政の草の袂も破れ 芭蕉

續世時人傳 釋の日政の子妙子と号ま不
可思議又泰定とも称ま姓は菅原平安の人
り。母は石井氏元和九 紀年二月二十三日京
師一条のりより生つ十三歳の時より井伊直孝
君より母の氏をとつて石井俊平とつて十六
歳して妙顯寺日豊上人より名をひて佛門
〇 久々の日

り今、後深草工隱遁の地を以て瑞光寺と名づく。後父母の舎をまうけて称心菴と名づく。孝養をこころ度ふ。父は行年八十七にして終る。四年七十九となりて身延山に詩人更を著らん。師をまうけてまに詩をこの時の紀行あり。後母も八十七にて終る。その二七のり師俄に病臥。明年壽四十六。寛文八年二月十八日仕屯。草の袂に苔の衣とつと同しく和歌の作例あり。附意。豆腐つくと母の喪よりこころをこころにその人を元政法師とて。悲歌のり。草の袂も破れ。他よりひまうてふ。附

伏見木幡の鐘をまうつ

草山集 政居在城南深草宝塔寺之下
溪水前流松岡路細之和隣寺晚鐘 詩云隣寺

鐘鳥善景清獨遇曲也堪聽 伏見深草のついき木幡は休屋東より 附多元政法師の別小悲歌のり。今よとよ草の破れ朽れまうて隣寺の鐘無常をつんば伏見木幡の鐘をまうて黄舎の四色をまうて。夫にりうまうて相又まうてまうてまうて。慶政上人が徒困り山屋の春のゆをまうて。入相のり。折る花の自然まうて山屋のまひ。一ヨウまうて鐘のい。花のら。我まうてまうて鐘をまうて作れ。其音。白詩より。大長四。正立五元集。上野清水堂まうて鐘。け。其角。い。ろ。子。き。男。猫。し。つ。を。捨。る。杜。國。附意。入相の鐘をまうて春のうい。藤。ふ。く。鐘。猫。の。色。まうて。春のまうて。重五。冬。の。日。

○ 冬の日

内裏の庭上白砂をふるふ故に雪と云ふ **雍州**

府志 白川の奈之凡斯山の地中悉く白石

あり世に所謂白川石是なり村中の石工斧鑿

を以てこれを研る異名の細工碎る者砂石と云ふ

是を禁庭に敷る之 **附志** 杖草紙は猫を奔

と名付けて愛しりひり作らるる

と官せと云ふ色ふき男猫の久あき指さ

て云ふもの多しをよび尋ねる人しと云ひつ

こころ附志

水子せんを秀さう勺しやくの聖せいわわややりり 野水

桃華葉葉 水子の更紗さらああるる生なま平へい絹きぬききも

又色白くとも何れも大御言の時まで内こ

いと着用也 **附志** 三才箇会 拵たてもも水子みづこに精

好よしを用もち其色定さだままりり其製端せの直垂ちかの如ごとく

しと袖拵そでたて露つゆ紐ひもありと水子みづこに林はやし中なかにそい

着用され高の會席或は浴外遊ゆかり覽らん又は旅行

の時ふと着用も畧服政無傍人も着用せしり

附志 秀勺の聖といふ人例の會席かいせき一考いこう

と中なかああるる雪ゆき掃はきもも画えりりをを所用しようなり

てしひりつるに附つくくささるる作しやうの表へ其そのの公卿

のささままつつふふと作者野水のうみづの趣意しゆい巻経まききやうの端書はながしに

紙し子こははととくくのの荒あらりりめめととふふにに對たいてて水みづ子こ

着きりりああるるままよよりりああるる狂くるのの身みににままよよりり早はや

下したりりああるる對たいてて秀しゆ勺しやくの聖せいわわややりりと崇たかむむ五哥

仙せんのの巻まききのの座ざ子こににままよよりりめめととまま拵たてとと風かぜ雅みやび

実情じつじやうをつつくくそそのの門かど人ひとのの尊たうとん放はなととらら能よ踏ふみのの自在

と云ふ

山茶花さんぢあなはな白しろくくのの葉はののこころろし

附志 野水のうみづの尊放たうとんはなの意いをを述のつつ巻経まききやうの服ふくののたたも

と云ふ山茶花さんぢあなはなと云ふ又對たいてて水みづ子こをを聖せい

と云ふ山茶花さんぢあなはなと云ふのの木き拵たてふふままてて身みにに暖

と云ふやああるると云ふにに附つけけ五哥ご山さん連れん環わんのの体たいと

冬ふゆのの日ひ

子ころ

○ 追如

いふふと難面(なんめん)をうん(うん) 羽(は)

夫木(つまき) 夫木(つまき)の鳴の上(なるのうへ)も(も)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)

いふふと(いふふと)雷(かみなり)の(の)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)

て(て)も(も)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う) (うろろんたまうまう)

いふふと(いふふと)

樽火(づかひ)の(の)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)

附(つ)き(き)分(ぶん)六(ろく)日(にち)牛(うし)お(お)の(の)野(の)宿(しゆく)ふ(ふ)る(る)金(かね)津(つ)五(ご)と(と)そ(そ)樽(づか)

油(あぶら)と(と)他(た)國(くに)へ(へ)つ(つ)け(け)い(い)ま(ま)牛(うし)十(じゆ)と(と)一(いち)連(れん)追(お)

ゆ(ゆ)い(い)つ(つ)ま(ま)牛(うし)の(の)勞(らう)て(て)ね(ね)い(い)所(ところ)を(を)追(お)の(の)度(ど)ま(ま)

牛(うし)の(の)荷(に)を(を)負(お)ふ(ふ)が(が)剛(ごう)し(し)牛(うし)追(お)い(い)飯(いひ)の(の)後(のち)家(か)よ(よ)ま(ま)ふ(ふ)

と(と)て(て)煮(に)く(く)下(した)に(に)枯(か)枝(えだ)を(を)い(い)ち(ち)い(い)あ(あ)つ(つ)て(て)焼(や)け(け)酒(さけ)

昼(ひる)の(の)道(みち)を(を)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)を(を)追(お)つ(つ)て(て)の(の)む(む)

に(に)管(くだ)登(のぼ)り(り)酒(さけ)を(を)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)を(を)追(お)つ(つ)て(て)の(の)む(む)

このもえ火をさして樽火といふは、樽火といふ

つけし樽火といふは樽火といふは、足常の酒なり

松の根をいふは、松を休めしむといふは、松の樽火とい

て松の根をいふは、松を休めしむといふは

いふふと(いふふと)下着(したぎ)の(の)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)

いふふと(いふふと)山(やま)中(なか)に(に)石(いし)の(の)隙(ひま)を(を)

せ(せ)し(し)下(した)着(ぎ)お(お)賊(ぞく)の(の)謡(うた)木(き)の(の)麻(あ)衣(い)袖(そで)の(の)れ(れ)を(を)

と(と)い(い)ふ(ふ)木(き)賊(ぞく)の(の)時(とき)着(ぎ)用(もち)る(る)鹿(か)服(ふく)を(を)い(い)ふ(ふ)

いふふと(いふふと)上(うへ)着(ぎ)の(の)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)

いふふと(いふふと)持(も)つ(つ)て(て)酒(さけ)を(を)樽(づか)に(に)い(い)れ(れ)る(る)

いふふと(いふふと)樽(づか)火(ひ)を(を)い(い)ふ(ふ)て(て)松(まつ)を(を)い(い)ふ(ふ)て(て)の(の)む(む)

いふふと(いふふと)

樽(づか)火(ひ)の(の)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)

治承四年高倉の宮御謀叛既(し)に(に)あ(あ)る(る)三(さん)井(い)寺(じ)の(の)

か(か)つ(つ)一(いち)降(くだ)り(り)あ(あ)る(る)女(に)房(ぼう)の(の)装束(しょうそく)上(うへ)や(や)つ(つ)し(し)市(いち)

女(に)笠(かさ)を(を)う(う)ろ(ろ)ん(ん)玉(たま)と(と)馬(うま)と(と)う(う)大(お)塔(た)の(の)宮(みや)能(の)野(の)路(ぢ)を(を)追(お)

○ 冬の日

海一りの舟もいさる休意もなし **附き** 捨る筈
官をあつして後露ふこけ 燧燧の同返を越す
船一とて木賊のついでさす **附き**

銀の蛤 かんん月、海 芭蕉

附き 捨る官をあつしてのせ 終夜 絶所 画町
のいといふく同返をまじり 工月、海のこころありあ
けつ夜に不のくことけく朝つゆさく 朝景色
をまのふもいさるこころ 供のくく空腹さく手
ぶてふくいのせんとあふ折る 蛤 荷ひてゆく者
ありけんいさるんをいさるんをいさるんをいさるんを
るふ故 供人 可いこいてこれ銀をのりてんとあま
ま **附き**

ひぶりの橋をまじりて 岐阜山 野水

岐阜山い美濃国原見那ふあり 古註 栗名 漫 蛤
と定て左の橋をまじりて 右は 岐阜山をこゝ 眼前に
青藍 括まじりて 橋をまじりて 岐阜山とていさるん

八山より橋をまじりていさるんをいさるんをいさるんを
のりて木の向よりまじりていさるんをいさるんをいさるんを
いさるんをいさるんをいさるんをいさるんをいさるんを
今橋より 貞享年間みまじりて 右東海 道 六 御の
渡り 昔 橋 耳 じ 数 也 あり あり あり あり あり
るし。又 勢 州 栗 名 也 あり あり あり あり あり あり
八里今大垣より折る蛤をまじりていさるんをいさるんを
るは月後を夜あらんいさるんをいさるんをいさるんを
まじりていさるんをいさるんをいさるんをいさるんを
まじりていさるんをいさるんをいさるんをいさるんを
いさるんをいさるんをいさるんをいさるんをいさるんを

貞享子甲子歳

俳七部集初学卷之一終



